
ルードシアの守り人～黒?～

後藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルードシアの守り人〜黒?〜

【Nコード】

N0434X

【作者名】

後藤

【あらすじ】

頭から赤茶色の頭巾を被り、馬を駆って一気に丘を駆け降りるその人が叫んだ。

「突破する!!!」

走り出した馬の勢いを増すその先には数百ほどの魔人達が狂剣や狂光を帯びた武器を構え、城を背に行く手を塞ぎ一斉に向かってきた。馬に乗ったその人が背負っていた剣を引き抜くと「念」を込めた。

それは赤黒い雷を帯び、天の雷神を呼んだ。

同時に馬体を左に寝かせると、その魔人の群衆に向け、雷神を解き放った。

それは、弧を描く剣波が幾つもの層を成すと、一閃！・・・全てを切り裂いた！

序章：ルードシア王国（前書き）

この小説は主に「小・中・高生」のあこがれや願望などを「異世界」という場で表現して書いています。

特に私の少年時代の個人的なあこがれや願望を題材にしています。共感して頂ける方も・そうでない方も、「少年時代のあこがれ・願望」を思い起こす一つの手段となれば・・・幸いです。

（文章力の低さはご勘弁を（笑））

序章：ルードシア王国

序章：ルードシア王国

世界は今、主に三つの種族から成っている。

魔人、獣人、そして人間。

過去から今に至るまで多くの土地や種族争いの絶えない日々が続いていた……

彼らがようやく個々の国々を持ち、敵対する種族に対する知識や技術の限りを尽くし、ようやく国の平定を得る事の出来た国が出始めた。

しかし巨大な大陸の中で、それはまだほんの一握りに過ぎなかった。その中の一つにルードシア王国があつた……

ルードシア王国は、四方を海に囲まれ、唯一、隣国のミンに通ずる陸地が伸びていたが、その陸地もまた二つの巨大な山脈が国境を挟むように伸びており、ルードシア側の山脈は遠くハルデイスの国まで続いていた。

山の狩人でさえ、ルードシアからミンの国に入るには、ゆうに10日を要した。

ルードシアの国益を産出していたのは主に漁業と畜産ではあつたが、温暖な気候に恵まれたその地は野菜や果物も多く取れた。

長い間、戦も無く平和な生活を送るルードシアに、馬に乗った一人の旅人が辿りついた。

「ふう」

三日前に食事をしてから今日まで、'まとも'な物を口にしていない。喉の渴きと空腹を抑えながら夕日に消えかかる城門を目指した。

日が暮れた頃に城門に着くと、城内に入るために列に並んだ。

ようやく兵に呼ばれると、馬の手綱を引き、城内に入るべく進んだ。
「お兄さん、１０００リリーだよ」

門番がニヤニヤと近づいて来ると手を出してきて言った。

その門番の身なりは御世辞にも立派な鎧ではなく、どちらかといえ
ばあり合わせのモノで身を包み、又、護衛用の銃もだいたい年季の入
った代物である。

髭を蓄えたその顔は良く日に焼けて老けた感じもするが、肌の艶か
ら年の頃は恐らく３０歳前後・・・という感じがした。

【オラルが城門でサルージに言われた１０００リリーは、その国で
働く人達のおよそ一日分の手当てであった】

どの国も入国するにはそれなりに金品を差し出すが、国によっては
そのまま通れる国もある。

それでも一応はそれなりの手続きをするのだが・・・ここまであから
さまに堂々と要求してくるのにはちよつと面喰った。

一通り回りを見ると、一応はそういう《決まり》になっている様子
が見てとれた。仕方なく馬に積んである荷の中からおもむろに、何
本かあるうちの銃の一つを取り出して聞いてみた。

「これでいいかい？手持ちが無いんだ」

門番は少しの間、考えたようだったが・・・銃を良く見るうちにだい
ぶ笑みを浮かべた。

「んっ？！・・・まあしょうがないな・・・いいよ、通りな！」

（なるほど・・・このテの物はどうやら歓迎されるらしい）

活気のある大通りを進み、なだらかな坂道を登りながら左右に分
かれる道を左に進んだ。道が少し狭くなってきた所に食事ができそ
うな店を見つけると、馬から降りて馬止めに手綱を掛けた。

（ いい匂いがする・・・ ）

夕食の時刻ともあって、中から食事を楽しむ声が聞こえてきた。

簡素なドアを開けて店に入ると、客が数人・・常連だろうか？テーブルを囲み、食事をしていた。

カウンターには五つの椅子があり、そこには誰も座っていなかった。カウンター越しの若い女性に近づいて声をかけた。

「あの、すいませんが食事・・出来ますか？」

その若い女性は一瞬、身なりを確認すると笑顔で答えた。

「はい！出来ますよ。メニューは無いから適当になりますけど、それで良ければ」

「そうですか、ではそれでお願いします」

カウンターの真ん中に座ると、食器を片づけながら女性が聞いてきた。

「お客さん・・旅の人ですか？どちらから？」

「はい、ちょっと人を探しながらあちこち・・」

「そうですか、見つかるといいですね」

何気ない会話をしていると裏から声がした。

「ライム」テーブルの料理上がったよ」

「はーい！お客さん、少し待っていてくださいね」そう言うとコップに水を注いでから裏に行った。

いい匂いにつられて腹の虫が鳴き出した頃に「お待たせ、やっと落ち着いたよ」と、いいながら恰幅のいい女性が料理を運んできた。

「あら？見ない顔だね・・旅の人かい？」

そこにライムが裏から料理を運んで来ると笑みを浮かべて言った。

「こちら私の母でマリーっていうの。母さんも私と同じこと聞いているわ・・」マリーは、そうだったのかい？と、笑って返した。

「どーも、この辺りで人を探していて・・」と、すまなそうな返事をすると

「それもさつき聞いたわ」穏やかな笑いがその場を包むと、場が和んで良かった」ということにしておいて・・久しぶりの「まとも」な食事にスプーンを取った。

「いただきます！」

おいしそうな豆と鶏肉のスープ、それとパン。スープを一口飲んだ。
「おいしいですね！」

自然と笑みがこぼれた。それを見ていたマリーが微笑みながら聞いた。

「お客さん、これからどちらへ？北の方にも行くのかい？」

「そうですね、とりあえずこの街に居なければ」

「そういえば最近、いい話は聞かないね」どこかで戦が始まったって聞いたよ・・・まつ、商売人にはいい話だろうけど」

「そうですか・・・この辺りは大丈夫ですか？」軽く微笑むとマリーは得意そうに答えた。

「ここはルドシア王家の一族が代々守ってきた国だからね、昔から争いの無い平和な国だよ！回りは湖に囲まれているし、それに《守護神様》とやらが守ってくれているって話だよ！」

「守護神様？それは頼もしいですね」マリーは満面の笑みを浮かべて答えた。そこにテーブルのお客が呼んだ。「マリー！水を頼むよ」「はいよ！」コップに水を注いでいるマリーに聞いた。

「あの、しばらくこの辺りに滞在したいのですが・・・近くに宿はありますか？」

「ああ、そんな事だったら、うちでよければ泊っておくれ、部屋は空いているから。たいしたものは無いけど飯はうまいよ！」

いい匂いで目が覚めた。

外から、元気にはしゃぐ子供の声が聞こえた。部屋から出てきしむ階段を下りると、昨日のカウンターに食事の準備が出来ていた。

「おはようございます」

「ああ、オラルさん。おはよう、そろそろ起きる時間だと思ってね、食事の支度は出来ているよ。終えたらここに運んでおいて・あとは娘がやるから」

そう言いながらエプロンを外した。

「あの、何か急ぎですか？」

「ええ、今日はこの城の姫様の恒例の行事で、そのお手伝いだよ」
「恒例の行事？」

「ただのハイキング・まあ、平和な証拠かな？じゃ、よろしくね」
「！」

そう言い残して足早に出て行つた。

オラルは食事を終えると食器を洗い場に運んだ。そこにライムが荷物を抱えて買い物から帰つて来た。

「あらすいません、母は？」

「なにか急いで出掛けましたけど」

「・・・ああ、今日は姫様の所ね！」

「姫様？と知り合いなのですか？」

「いえ、姫様もなにも・・・みんな家族みたいに接していますよ」

オラルは支度を整えると店を出た。

（さてと・・・何処から探そうか・・・とりあえず・・・アイツ？の所にも行つてみる事にするか）

荷を馬に乗せると昨日、銃を渡した男のいた城門に向かった。朝の早い時間にもかかわらず、大通りは昨晚と同様、活気に満ちあふれていた。城門に近づくと昨晚銃を渡した門番が城門を行き来する人に話しかけているのを見つけた。

日のある所でその姿を見ると、意外にもガツシリとした体形であることに気が付いた。その人柄を観察しながらゆっくりと近づくと・・・目が合った。

向こうもニヤツ！と、気付くと、何気なく互いに歩み寄つた。

「昨晚はどうも・・・この持ち物をお金に替えたいのだけど場所を知らないかい？」

オラルは馬に乗せてある荷を軽く叩きながら聞いた。

「ああ、知っているよ。でもナゝタダつてわけにはいかないなゝ」
「どうやら門番という仕事の味を占めているらしくニヤニヤと荷を見ながら答えた。

「そっか・・・では案内してくれたら・・・一つ譲るよ」荷物を触り

ながら言った。

「そうこなくっちゃ！兄さん、気前がいいね〜ついてきなよ！」そう言って勝手に馬の手綱を持つと引いていった。

「気前のいい兄さん、名前はなんて言うんだい？」

「ああ・・オラルって名だ」

「そうか、オラルさん。俺はサルージ、よろしくな！・・ところで・・その荷物、どこで手に入れたんだい？いい品物が揃っているんだけど？」興味新進な顔で荷を見た。

「・・・ああ、それより昨晚渡した銃は気に入ってくれたかい？」するとサルージはコートの中に大事そうに抱えている銃をさすって言った。

「そりゃあ気に入ったさあ〜今まで持っていたのを今朝、売っちゃったよ。それにしてもこれは初めて見る銃だ・・こんな立派なものをくれるなんて、あんた何者かね〜正直、荷物の中身を知りたいくらいだよ」

「まあ・・俺には必要のないものさ、それよりも旅賃が無くなってきたから・・」

「そうかい？・・商売人には見えないが・・まっ、訳ありなんだろう？ここはそういう連中がたくさんいるからな」

話をしながらしばらく進むと大きな石積みの家を指して言った。

「あそこの店だ、俺が話しを通すよ。そうすりゃボラれないですむから、そのかわり・・いいところ、よろしくな！！」

サルージは店を紹介する代わりに昨日貰った銃より、いや、それ以上のモノを貰えると信じて疑わなかった。

サルージは機嫌良く、足取り軽やかに石積みの門をくぐって中に入った。

「お〜い！ラリエルじいさん〜！客人連れてきたぞ〜！・・・あれっ？・・お〜い！じいさん！」

しばらくすると店の奥からゆっくりと杖を突いたじいさんが出てきた。すでに80は超えていると見えるラリエルが言った。

「なんじゃ、サルージ：ジェンタか。客人・・・あんたこいつに騙されたんじゃないのかい？」ラリエルは二人を見てガツカリとした表情を浮かべた。

「とんでもねえ！今日の客人は今までとは訳が違う！まあ見てやつてくれよ」

オラルは二人を尻目に馬から荷を外すと一際大きいテーブルに「ドサツ」と置いた。

「これ全て旅賃に替えたいのですが・・・」

「ひゃゝこれは・・・大したもんだ・・・」サルージは目を輝かせて言った。

この中のどれが紹介料か・・・などと満面の笑みでみると、ラリエルはオラルの顔をジロジロ見ながら一つ一つの品物を手に取り順に見た。

そのうちの一つの短剣を持つと、窓から入る日に翳した。そして考え込むと・・・聞いた。

「これは・・・どこで手に入れなさった？」

オラルはその品から目を反らすと別の品を見ながら言った。

「それは西の大陸で・・・知り合いから頂いたモノです」

鈍い銀光を放つその短剣をラリエルはジッと見つめると、今度は相手を射抜くような鋭い眼差しでオラルを見て聞いた。

「頂いた？・・・そうか・・・」

「何だ、じいさん？知っているのか？」サルージが口を挟んだ。

「いや？・・・いい品だ。そうだな・・・全部で・・・10万リリーでどうだい？」

「10万？じいさん、安いのか高いのか分からんな」サルージが代わりに答えた。

【サルージの持っている銃は二万リリーほどであるから10万はザツと銃5丁分に当たり、ただ飲み食いするだけならユウに三月は持つ計算になる。

ただ、並みの商人ならその5倍以上の価値のある品を換金するのが通例であつた。」

「どうじゃ？若いの？・・やめとくかい？」その短剣を持ってラリエルがオラルに聞いた。

「・・いや・・それでいいです」

するとサルージが「ちよつと待った！俺の取り分がねえ」二人の間に割つて入った。

「サルージ、そこから2万を取ればいい・・」そう言つてサルージの肩をたたいた。

「あんた、こいつに2万もやるのか？」金を数えていたラリエルは手を止めると「なぜ？」という顔で聞いた。「オッケーオッケー！話はついた！あんたホントにいい人だ！」

オラルはラリエルから受け取った札束の中から2万をサルージに渡し、残りをしまつと軽く礼を言つてから外に出た。

「お客人、これからどこへ行かれるのじゃ？」

帰り支度をしているオラルにラリエルがなにやら聞きたそうな素振りで見えてきた。

「人を探していて・・近くの街を回つてみるつもりです。でも北には行かないほうがいいって宿のマリーさんが言っていました。何だか危ないらしくて・・」

「・・そうか・・西の大陸も危険な所じゃと聞いたことがあるのじやが・・」

「・・・・そうですね・・・なるべく近づかないようにしていました・・・ではこれで」

ラリエルじいさんの視線を背に感じつつ軽くなった馬を引いて石積み門を出るとサルージが言った。

「オラルさん、いや、だんな！このあとどちらへ？なんなら御供しますよ！」

《だんな》・・と、調子よく呼ぶサルージは、懐が温かくなつたか

らなのか、それとも・・・なんとも憎めない顔で聞いてきた。

「・・・そうだな、そういえば腹へったな・・・」

「分かりました！そういうことなら旨い店を知っています、行きましょう！」

太陽が一段とまぶしくなったところ、山脈の始まりの先端近く・

・山の入り口の開けた場所に着いた。

「ここです、その階段を上がったところですよ」

そこは小さな丘を上手に利用した開放的な店構えであった。階段の上を見ると多くの客で賑わっている感じが見てとれた。

「サルージ？そういうえば仕事の途中だったのではないのかい？」

「いやいや、たいした仕事じゃないですよ！門番なんて居ても居なくてもこの国には大して問題ありませんから」「そんなものなのかい？」

「気にしなくていいですよ！さあ、いきましょー！」

そう言いながら階段を上がって行った。随分と気楽な考え方だな？それともこの国がそうなのか？と、思いながら後に続いて階段を上がっていった。

その時・・・かすかに銃声が聞こえたような気がした。

《聞き間違いか？》

今度は森の方に耳を澄ます。

ターン！・・・

次は少し近くで聞こえたような気がした。

《何だ！？》

何かを感じ取ったオラルは、階段を下りると、すかさず馬に乗り、銃声のする森に駆け出した。

「だんなー！どこへ行くんですかー！」

サルージの声をそのまま聞き流しながら・・・さらに速度を上げた。森の中を深くに進むと、遠目に水面が見える所で何やら騒ぎ声や銃声が聞こえてきた。街道から森に馬を向けると、そのまま道なき道

を音のする方に向かい、暫くするとそれらを目視できる距離に近づいた。

兵隊だろうか？数人の女性を囲むように・・・賊？らしき人達と戦っているのか？

何やらすでに湖を背に囲まれている状況だ。

遠目に馬を止め、気配を殺しながら歩いて近づくと・・・なんと女性の中に・・・マリーさん！？

一人恰幅のいい姿で・・・間違いない。マリーは槍を構えて中心の女性を守っている。

《朝、マリーさんが言っていた・・・という事は、あの人が姫様ということか？・・・でも状況は劣勢だ》 20〜30人ほどの賊だろうか？リーダーと思われる、一人体格のいい男が集団の後ろで腕組みをして見ている。その男が言った。

「あきらめろ！そんな人数じゃ勝ち目はねえ！おとなしく渡せばおまえは見逃してやる！」

序章：ルードシア王国（後書き）

パソコン始めて3か月・・・ようやく妄想を文字に打てるまでになりました。

壮大なファンタジー小説！・・・とまではいきませんが、最後までお付き合い頂けたら「私の執筆活力」とさせて頂きたいと思います。

湖

湖

姫の一行は恐らく奇襲に遭ったのだろっ、護衛兵と思われる数人の兵が散らばって倒れている。

残りの護衛兵は敵の半分にも満たない。

オラルは馬を降り、息を殺すと木の陰に隠れながら少しずつマリーがいる方に向かった。

そして飛び出せば何とかマリーに近づける距離まで来た。

飛び出す機会を伺いながら賊頭^{リーダー}を見ると、何やらゆっくりと黒い影が「スウーッ」と、背後に付くのを見た。

《・・・あれは誰だ？・・・どうするつもりだ？》

賊頭は？見ると気づいていない。

するとオラルの背後に人の気配が・・・それはささやくように話かけてきた。

【私が仕掛けたら姫を連れて安全な場所へ・・・】

はっ！？と、声のした方を振り向くと・・・誰もいない。

聞き間違い？・・・では無いと、確信した。

見るとその影が賊頭の口を塞ぎ、同時に首にナイフを当てていた。

「おい！おとなしく下がれ！」

賊が皆、振り返って賊頭を見た。

「なに！」賊の動きが一瞬止まった。

《今だ！》と、ばかりにオラルは木の陰から飛び出し、

賊の手薄になっている後方からマリーのもとへ走り寄った。

「マリーさん！大丈夫ですか！」

「・・・あれ！？オラルさん！どうして！？」

「訳は後で！さっ、早く！」

水辺に沿って姫の一団を連れて行こうとしたとき、賊の一人がニヤ

つきながら近づいて来て言った。

「おい・・・なめてもらっちゃこまるな」

《ワハハハ》と、賊が一齐に笑いだすと・・・賊の体が突然身震いを始め、全身の筋肉がボコボコと波打ち、さらには膨らみ、見る見るうちに見上げるほどの巨人の姿に変化していった。

「キヤーツ!!」

侍女が恐怖のあまり叫んだ。

「・・・なんだ!?!・・・化け物!!」

構えていた兵達が後ずさりをするなか、マリーが叫んだ。

「姫様!大丈夫です!私が御守りします!」

オラルは、ふと目を巨人となった賊頭に向けると、先ほどの影はそこにはなかった。

その巨人となった賊頭が一团に近づきながら声を張った。

「こうなったら容赦シネ!全員!ひねりツブス!!」

20人ほどの巨人が姫の一团を囲みながらジリジリと近づいてきた。
「たっ!・・・隊長!」

兵が叫んだ。が、抵抗できるはずもなく湖を背に追いつめられていった。

「姫に指一本触れさせるな!」

隊長は強気であつたが・・・状況を変えることは出来そうにも無かつた。

《巨人か・・・魔人の仲間か?何者なのかは分からないが・・・ここは仕方ないか・・・》

オラルが兵の前に出ようとした時、空から声が聞こえた。

「おまえら!それは、こっちのセリフだあ!!」

声の出所を見ると空に大きな黒い輪ができ、太陽の光を遮ると影を落とした。

その黒い輪が徐々に中心に集まり、次の瞬間、幾つもの黒い球となった輪が弾けた!

その黒い球が剣を持った人の姿に変わると一齐に巨人達に降りかか

り、同時に構えた剣を振りおろすと巨人達を真つ二つに切り裂いた。あつ！という間の出来事だった。

見ると裂けた巨人達は黒い煙を出しながら蒸発して消えていった。そして巨人を切り裂いた黒い人影は瞬く間に元の一人の影に戻っていった。

「フウ」っと、大きく溜息をついたその影は、姫の一団を向いて一礼すると身を翻し、

無言のまま去って行った。

あまりの展開の速さに、皆が呆気にとられていた。

「なにが起きたの？・助かったの？」

身を寄せ合っていた侍女の一人が立ちあがって言うと

「そつみたい・ですね」姫が答えた。

「姫様、早く城へ戻りましょう・」

まだ恐怖心の収まらない侍女達が言った。姫が周囲を見渡すとオラルを見て言った。

「そうですね・あの・助けに来てくれてありがとう」

姫は恐らく今の影がオラルの仲間だと思っていたらしく、気丈に振る舞いながらも笑みを浮かべていた。

「いえ、何も出来なくて・あの・」

「さっ！オラルさんも早く！」

返事の途中でマリーに急かされ、残った兵に護衛されながら姫の一団のシンガリに付くと城に向かった。

その戻る途中、サルージと別れた店の前を通ると少し離れた森の中から呼ぶ声が聞こえた。

「だんな〜忘れ物〜！」

見るとサルージが手を振りながらオラルの馬を引いてきた。オラルが駆け寄って聞いた。

「・・・サルージ？どうして？」

「どうしてって？こつちが聞きたいですよ、急に行っちゃうから・・だんなの後ろ追っかけて行ったらこいつだけ戻って来たので、びっ

くりしましたよ」

「・・・そうか、悪かった」

「ところで何かあったんですか？あれ、姫様ですよ？」姫の一団を指して言った。

「いや、たまたま会っただけだよ」

「・・・なんだ、そうですか」

サルージは一団を見送りながら興味の無い返事をした。

日も暮れて一人宿に戻ったオラルはカウンターで食事しているとそこに客が入ってきた。

「ここに居りましたか、先ほどはどうも・・・」

ラリエルじいさんだった。

「あなたに、少し聞きたい事がありましたな・・・」

「はい？」

ラリエルは隣に腰掛けると、持っていた包みを開いてあの鈍い銀光を放つ短剣を取り出した。

「この短剣のことなのじゃが？・・・本当に譲ってもらったものですかい？」

顔を覗き込むように聞いてきた。

「・・・いや、あの、本当は拾ったものです・・・」

「拾った？これを？・・・西の国で、ですかい？」

「はい。戦やら何やらで、戦場跡を見ていて・・・そこで見つけました」

ラリエルはオラルを見て少し考えると言った。

「そうか・・・わしも自慢じゃないがこの歳になるまで各国を色々と見て、聞いて回ってきたものじゃ。」

そしてこれが何かも「ワシ」は知つとる。

これは西の国のアルセルディムの王が懐刀として肌身離さず持ち歩いていたものじゃ。

恐らくあんたも聞いたことがあるじゃろう？アルセルディムは人の

近づける所では無い。

あそこは魔人の国じゃ。

魔人同士・・・恐らくは激しい戦があったのじゃろう。

だが、戦場跡に落ちていたとは到底思えん。

ましてアルセルデームの王を倒せるものがこの世に存在するなどと・

何か知っているのなら少し話してはくれませんかいの？」

昼間見せた鋭い目付きとは違い、心を見透かすような確信を持った目で聞いてきた。

「そう言われても・・・そんな物だとは知りませんでした・・・それ、もつと高い値がついたのですか？」

ラリエルは返って来た言葉に目をパチパチすると・・・
今度はあきれた顔で「・・・なんじゃ？」といいつつ短剣をしまった。

その話をカウンター越しに聞いていたライムが話かけた。

「ラリエルじい、その魔人って人の姿をしていないかい？突然、巨人に姿を変えたり？」

「・・・ライム、知つとるのか？」すかさず聞き返した。

「街の人が噂を・・・昼間、姫の御供をしている時にそんな連中に襲われたって・・・」

護衛の兵もほとんど殺されたって」

「それで！姫はどうなった！無事なのかい！？」

「ええ、誰かに助けられたって聞いたわ。でも助けてくれた人はすぐにとっかいっちゃったって」

「・・・なんと・・・この地にまで奴等がきているとは」

ラリエルは頭を抱えながら続けた・・・

「わしも商売柄、色々と耳にする。

ワシの察するにアルセルデームを始め、他の魔人の国々に何か大変な事態が起き始めているらしい。

その余波がいたる所で災いをもたらし始めたのではないかと感じる。

この国、ルードシアは昔から代々王家が守り、災いの無い平和な国を維持してきた。

それが今のライムの話の聞くに・・・何かよからぬ事が起こる気がする。」

少しの間、沈黙があつた。

そこへ城からマリーが戻つて来た。

「ただいま！あれ？珍しい、ラリエルじいさんじゃないか？」

「おお、マリーよ、しばらくじゃったな」振り向いて答えた。

「ええ、あつ！オラルさん・・・大丈夫だったかい？助けに来てくれて、姫様がお礼を言っていたわ。」

一時はどうなることかと心配したよ」

えっ？つと、ラリエルとライムがオラルを見た。

「いえ、マリーさんこそ無事で何よりです・・・それより何もできなくて・・・」

「そんな事ないわよ！どれだけ心強かったか」そしてライムが聞いた。

「・・・母さん、昼間何があつたの！？」

昼間の出来事

昼間の出来事

「この辺りにしましょう」

山脈から湖に小川が流れ込む少し手前の所を指差して姫が言った。馬車から姫、侍女が降り湖を見渡した。

「綺麗ですこと。今日は風もなく穏やかですね」侍女が言った。兵がテントや食事の準備を始めた。

「あの船、漁をしているのかしら？」少し沖に停泊している小舟を指して姫が言った。

「今日は天気もいいから大漁かもしれませんね！」侍女が相槌を打つと

「そうですね！なんなら少し分けて頂きますか？」近くで荷を下ろしている兵も乗った。

「そうですね、もし近くに來たら聞いてみましょう」

「姫様、食事の準備が出来ました。」

湖畔を散策している姫に侍女が近づいて言った。

「ありがとう。ではいきましょう」

テントではすでに宴の準備が整っていた。

「姫様、こちらにどうぞ」

準備された椅子に腰かけるとマリーがスープを注ぎテーブルに置いた。

「姫様、今日はカモのスープです。先ほど隊長さんが仕留めてくれました」

嬉しそうに言うとその隊長が近くに来て言った。

「姫様のお好きなカモが捕れました。皆さんのもありますので今日は存分に召し上がって下さい」

「ありがとう。キシアは獵がお上手ね！いつも感謝しています」とするとマリーが嬉しそうに言った。

「隊長さん、私たちの分まで捕ってきてくれたのですよ」

「まあ、それでマリーは嬉しそうな顔していたのね！」

「ごちそうさま。とってもおいしかったわ」

マリーがスープの皿を片づけ、紅茶を注ぎながら姫に話かけた。

「姫様、あの船・岸に着いていますね。漁、終わったのかしら？」

先ほど沖に停泊していた小舟が小川の少し先に泊まっていた。

紅茶を飲みながら談笑していると、そこへ森の中から男が一人出てきた。

見ると両手で持ったカゴに大きな魚を数匹携え、片づけをしている兵に近づいてきて話かけた。

「兵隊さん、この魚、いっぱい捕れたのでよかったですら食べてください」

「おお、こんなに！」

魚を持った男に気付いた周りの兵がみな寄って来た。

「隊長！！」

一人の兵が呼ぶとキシアが歩み寄った。

「おお、これは・これは、大漁だな、姫様も喜ぶだろう！」

カゴのなかの大きな魚を一匹持ち上げて言った。

「立派な大きさだ、今年は豊漁だな！」

「ええ・・・」

男が返事をするとはやら森に向かって視線を送った。

すると突然、森の中から数人の男が剣を振りかざし一直線に姫を目掛けて走って行った。

「殺すな！生け捕れ！」

何が起こったのか突然の事態に一瞬誰も動けなかった。が、キシアだけは違った。

持っていた魚を投げ捨てるとその先頭の男を目掛けて剣を抜き、飛

び出していた！

それを見た兵達も我に返ると、キシアに続いて剣を抜いた。するとカゴを持った男が忍ばせていた短刀で背を向いた兵の一人を切った。

「なに！」

兵が振り返ると森から飛び出して来た数人の賊が切りかかった。

「雑魚に用は無い！姫を捕えろ！」

回りに指示を出しながらカゴを投げ捨てると男は姫の一団に突進していった。

不意を突かれ兵はバラバラになりながら応戦した。

同時にキシアは賊の先頭の男を倒すと姫に駆け寄った。

「姫様！」

姫を侍女が囲み、その集団を背にキシアが構えた。

回りを見るとすでに数人の男が剣をかざし取り囲んでいた。

キシアの兵達はバラバラに散らばりながら応戦していた。

《ダーン！！》

キシアは音の方に目をやると、森で応戦していた兵が撃たれて倒れるのが見えた。

敵は続けざまに銃を放ち、護衛の兵を倒していった。

やがて勝ち戦と見るや、集団がゆっくりと歩いて近づいて来た。

「あきらめろ！そんな人数じゃ勝ち目はねえ！おとなしく渡せばおまえら見逃してやる！」

スーラン

「そうだったの・・・何者なのかしら？・・・人ではないとすると・・・その滅んだ魔人の国の人？そんな連中がうるついていたら、おちおち外も歩けないわ」

腕組みをしながらライムが言った。

「確かにそうじゃが、姫様を狙っていたのには何か理由があるはずじゃ、恐らくワシ等の知らん事で・・・大丈夫かの？」

マリーが続いた。

「ああいう連中が集団でこの城を攻めて来たら、城の兵隊じゃ太刀打ちできないんじゃないかね。やれやれどうしたらいいものか・・・」

「マリーよ、その助けてくれた人は誰じゃか分からののかの？」

魔人を一瞬で倒すほどの腕じゃ・・・もしかしたらそのお方がアルセルディムの魔王を倒したのかも知れん。

オラルさんもその場におったのじゃろう？何か見ていませんかいの？」

オラルへの疑いを無くしたラリエルが聞いた。

「・・・銃声が聞こえて・・・突然の事だったので・・・助けてくれた人もすぐに消えてしまつて・・・」

「そうか・・・」

マリーが続いた。

「明日になれば何か情報が入るかも知れないよ。城に行つて聞いてみるわ」

次の日の朝、オラルは食事を済ませると昨日の現場に向かった。巨人のいたと思われる場所には人の形の焼け跡が残っていた。

《やはりアルセルディムの手の者か？だが、何か違う気がする・・・》

・
》

回りを歩いてみると兵達の死体は無かった。

「おい！そこで何をしている！」

森の中から馬に乗った兵が数人、近づいて来た。

「この街の者では無いな、どこから来た！」兵に取り囲まれるとオラルは馬から降りた。

「あやしい物ではありません、人を探してこの街に来ました。

マリーさんの宿に泊っている旅の者です」

「そうか・・・ところで昨日の巨人を知っているか？」

「・・・いえ」

「巨人は人の姿をしているらしい、【仲間】が心配で見に来たのではないのか？」

「そんな・・・巨人って何ですか？」

「そうか、では教えてやろう。おい！捕えろ！」

最初からオラルを疑っていた兵達は、縄を取り出すと、問答無用！とばかりにオラルを縛り付けた。

オラルはそのまま抵抗せず大人しく縄をかけられ、兵に囲まれたまま城へ向かった。

城に通じる道で街の人々の視線を感じるようになった。

無理もない・・・

何年も争いもなく過ごしてきた人達にとって、縄で縛られ連れて行かれるオラルを罪人として見る以外にはなかった。

指を指す者、ひそひそ話す者・にらみつける者・・・子供達は笑い

ながら付いて来た。

やがて坂をのぼると徐々に森が深くなり、恐らく御城の中の北西に当たるその辺りは、ひっそりと生い茂る森に囲まれ、人を寄せ付けない静寂があつた・・・

やがて行く手に小屋が見え、数人の兵が柵の回りで警備をしていた。さらにオラルはそこから一人の警備兵と共に、さらに森の奥深くまで連れて行かれた。

「どこまで行く気だ？」

オラルの問いかけには答えずに無言のまましばらく進むと木々の間から城壁が見えた。

その城壁には様々な彫刻が施されている。

しばらく見ていくと、やがて入り口の門に着いた。

《この彫刻・・・姫様の顔に似ている・・・》

すると何処からか話かけてきた。

< その方の縄を取りなさい >

それを聞くやいなや兵があわてて縄を外した。

「姫・・・」

すると扉がゆっくりと開いた。

入り口から真っ白な石畳みの道が王邸と思われる建物まで続いていた。

< 中にいらしてください >

オラルは辺りを伺いながら中へ進むと・・・扉がゆっくり閉じた。

辺りを伺いながら石畳みの道を進み、建物の中に入ると、さらに長い階段が続いていた。

その階段をしばらく上がると広い部屋に出た。

「先ほどは兵が失礼な事をしました」

横の通路から姫が侍女を引き連れてきた。

「あつ、いえ、．．気になさらないでください」

真っ白なドレスに身を包んだ姿が昨日とは別人に見えた。

急に胸が高鳴ったのを感じた。

《美しい．．．》

侍女が奥の部屋へ案内をした。

「昨日はお礼も出来ぬまま．．助けてくれた方はお仲間ですか？」

「いえ、私も．．誰だか分かりません．．姫様の護衛の方だと思っております．．」

お礼をするのは私のほうだと．．」

「．．そうですか。マリーに話を聞いていたものですから、もしかして？と、思っていたので。

では誰だか分からないのですね．．．」

少し間を置くと姫に聞いてみた。

「あの、このお城は．．入り口に姫様のお顔が．．」

「はい、この城は昔から代々、姫を継ぐ者が守護神と契約をして守る事になっています。

この国が平和でいられるのも守護神のおかげです」

「守護神．．．そうですか、それで街の人は明るい顔をしているのですね」

それを聞いた姫はにつこりとほほ笑んだ。

「ただ昨日のような事は初めてで、皆が不安にならなければ良いの

ですが・・・

オラルさん、たしか人を探して旅をしていると聞きましたが？」

「はい、ですがまだ会えていません。もう少し探してみるつもりです」

言い終えると侍女が姫に近づいて耳元でささやいた。

「姫様、そろそろ・・・」

「・・・ええ分かりました・・・」

ではオラルさん、探している人に会えるといいですね。そこまでお見送りします」

そう言うとき先ほどの扉の入り口まで案内された。

扉の外には先ほどの警備兵が馬を引いて待っていた。

「マリーによりしくお伝えください」

「はい」

オラルは返事をしつつも、その姿が脳裏にしっかりと焼き付いていた。

《 守護神・・・マリーさん達が言っていた事か？ 》

考えながらもオラルはまだ胸が高鳴っていた・・・

すでに街は夕暮れを迎えていた。

馬を引いて、宿に戻る途中、大通りの真ん中に人だかりができていた。

近くに行つて見ると・・・何やら男女のもめ事らしい。

「あんたと私が釣り合つと思つていいのかい？見るからに貧相で、お呼びでないよ！」

若い娘が数人の男と、もめていた。

その娘は膝辺りまでのマントを着けてはいるが、身に着けているモノといえは・・

派手な帯？で、その立派な上半身を巻き、下はブカブカのズボンを短く切つて履き、

それを宝石のような装飾付きのベルトで固定していた。

「そんな格好して！男が欲しいのに決まっているんじゃないのかい？そうだろう？」

「なあ、ねえちゃん！金ならあるからよ！ちよつと付き合つてくれよ！」

「何言っているんだい！ここに私に合う男なんかいないね！じや！」

ふり向いて行こうとすると囲まれた。

「こつなつたら力づくで連れていくしかないな！」

回りの男がニヤニヤしだした。

「ああ、そうかい？だけど私に触れると怪我じゃすまないよ！」

彼女が回りを見ながら言い放つと・・オラルと目が合った。

急に女の表情が一変した。

「ああ！いた〜！」

オラルを指差し、叫ぶと人をかき分け近づいてきた。

「もお！探したんだから〜！」言いながら抱きついた。

「退屈だったのよ！ロクな男いないし！何処泊っているの？行きましょう！」

言われるがまま手を引かれ、苦笑いをしつつその場を離れようとした。

「ちよつと待ちなよ兄ちゃん！こちらが先だろ〜」

そう言われながら・・また囲まれた。

「すいません。妹が、何か迷惑かけたみたいで」

「妹！」

プウーっとふくれ顔をする

「私の旦那です！なにか文句あるの！」と言いながらオラルの手を強引に引くと囲いを割って出た。

「けっ！冷やかしゃがつて！おい！いくぞ！」

男達はぶつぶつ文句を言いながらその場を後にした。

女がオラルの腕を組んだまま離れずに歩いていると、先ほどの城に向かう時とはまた違う視線を感じていた。

やれやれ・・・などと思いつつながら、なるべく街の人と目を合わせないようにしながら宿に着いた。

「あれまあ探している人って旦那のコレ？ですかい？」

二人を見つけるとサルージがカウンターから近寄って聞いた。

「コレじゃないの！ダ・ン・ナ！」彼女が答えた。

「へえ旦那もなかなかやるもんですね！見直しましたよ！で、お名前はなんと？」

彼女をジロジロ見ながら言った。

「だれ！この変なの！」

オラルは二人を制して答えた。

「ああ、銃をあずけた、サルージだよ。彼女はスーラン」

「サル？やっぱりね！どう見ても人には見えないわ・・・で、その銃は撃てたの？」冷やかし顔で聞いた。

「おいおい旦那、あずけたって？くれたものでしょ？そっぴいばこの銃・・・」

まだ撃ってないけど・・・」

スーランがサルージの顔を覗き込むように聞いた。

「ふん？じゃあ撃ってみなよ、まっ、撃てれば？の話・だ・けど？」

そこへカウンターで話を聞いていたマリーが割って入った。

「およし！この国で銃を撃つときは戦争でも始まった時だよ。それよりオラルさん、その子が探していた人かい？」

「・・・はい・・・あと彼女の他にも数人いまして・・・これからまた人探しで・・・」

明日、ミンの国の方に行くつもりです」

「えっ？だんな・・・明日旅に出るの？」

「ああ・・・サルージには色々世話になった。マリーさんも、ライムさんも。いろいろお世話になりました」そういうと軽く会釈した。

「そうかい、まあしょうがないものね・・・またいつでも遠慮なく寄ってね。」

ところで、今日は彼女も泊りかい？」

スーランが身を乗り出して言った。

「そうです！もちろん一緒の部屋で！」

オラルがささず答えた。

「別々の部屋でお願いします」腕組みをしてスーランが答えた。

「冷たいのね〜でもそういうところがいいんだけど！」

次の日の朝、まだ日も昇らぬうちに宿を出た。

「気をつけて・・・」

「この街に来た時はまた寄ってください」

マリーとライムが見送ってくれた。

「はい、それでは・・・」

オラルが馬を引きスーランが後に続いた。

早朝にも関わらず大通りは荷を運ぶ人や店の準備をする人で賑わいを見せつつあった。

城門に近づくと荷を乗せた馬の手綱を持ったサルージが待っていた。

サルージはオラルに気付くと小走りで近づいてきて言った。

「だんな！お供します！スーランさん！こいつに乗ってください」

サルージが馬の背を叩きながら嬉しそうに言った。

「おいおい？門番はどうするんだ？それに家族は？」

「家族なんてありません、門番は知り合いに任せました！俺も外の世界が見てみたくなっただけですよ、

いいでしょう？」

スーランが言った。

「あらあら、また変なのになられたよね〜でもだめ〜」

冷やかに加減に覗きこんだ。

そこを何とか、と拝んで言った。

「そんな事言わないで〜お願いしますよ〜きつと何かの役に立ちますから〜」

断つても付いて来そうな勢いのサルージをみながら少し考えるとオラルはサルージの銃を指して言った。

「サルージ、その銃であの丘の鳥を撃ってみてくれ。それで連れていくか決めよう」

城門の外に見える小高い丘に数匹の鳥が群れをなしていた。

スーランが続いた。

「なるほど、そうね！それがいい！それなら文句ないよ！」

サルージが、よし！とばかりに城門を出ると少し歩いた所で銃を構えた。

「任せてください！俺の腕に勝る奴はいませんよ！」

オラルとスーランは互いに目を合わせると笑みを浮かべた。

「いきますよ！」

じつくりと、丘に居る鳥に照準を合わせると・・・サルージは引き金を引いた。

《バシュ！！》

銃口から月の形をした光が横に伸びたかと思うと・・・それが瞬時に縮まり丘に向かって飛んだ！つと、同時にサルージも後ろへ飛んだ！

「いたた？・・・なにが起きた？」

サルージが体を起こすと二人が笑っていた。

‘何で？’と、見ると・・・今まであつた丘が無くなっていた。

「へっ??」

銃と消えた丘を何度も見た。

「へえゝ撃てたねゝやっぱオラルは見る目が違うよゝ」

スーランが腰に手を掛けて言った。

「半信半疑だったけどね、まっ、よかった」

サルージが走ってきて聞いた。

「だんな？なんですか？この銃？」

オラルが馬に乗るとサルージに言った。

「サルージ、行くぞ！先は長い」

「そうそう！先は長いよ！」

スーランもサルージの連れてきた馬に乗り、サルージを置いて駆けだした。

「ちよつとゝ！ワシも乗せてくださいよゝ！」

・ 二人が走り出した後を、サルージが必死に追いかけて行つた・・・

第1章：アルミアの軍隊

第1章：アルミアの軍隊

アルミア王国はメルドール大陸の最南にある唯一の獣人の独立国である。

世界各地に獣人は住処を持っているが、それは人間も同じである。ただ魔人に関してはそれらに立ち入ることを許されず、各国々は魔人の対処法を独自に持っていた。

魔人の国は世界の中でもはっきりと区別されており、また、人間と獣人は魔人とは事を構えなかった。

ただ、どの国にも各国々に通ずる者があり、時には人に姿を変え、また獣人に姿を変えて活動をしていた。

アルミア国の北には人間の国メドル王国があり、アルミアとは親交が深く互いに共存共栄としていた。

そのメドル王国の北の隣国には魔人の国アルセルデウムがあった。

「国王陛下、たった今メドル国王の使者より文が届きました」

そう言うときエドス参謀は持っていた巻物を差し出した。

国王が巻物を広げ、読み終わるとエドスに言った。

「アルセルデウムが滅んだ・・・魔王も・・・」

「なんですと！」

周辺にいた従事者達がざわついた。

それを見たエドス参謀がゆつくりと手を挙げると・・・静まった。

「陛下、どこの国がアルセルデイルを？」

「そこには触れておらん、だが・・・たった1日で、と記しておる。にわかには信じられんが、どうやら真のようだ・・・」

「ならば周辺諸国にも同じように知らせが届いているはず・・・陛下、残った魔人共が各地で暴れ出す前にアルセルデイル国境を封じ込めなければ」

「そうだな・・・」

少し考えて王は言った。

「エドスよ、そなたは兵を連れ、メドル国王の力となってくれ。小隊ならびに魔術獣はメドルとアルセルデイル国境を封鎖せよ。このアルミアの地は絶対に魔人共には踏ませてはならん！」

次の日の朝、エドス参謀と約千人の兵はアルミアを出発した。メドルとの国境付近には、日も沈みかけた頃に着いた。

エドスは小高い丘の上から遠くに見える川を指差して言った。

「シエル、あの川を渡ればメドル国だ。夜が明けてからメドルに入る。」

この辺りで宿営の準備を」

「はい！畏まりました！」

得意げに敬礼すると小柄なシエルは大きな鎧兜をカチャカチャと鳴らしながら各部隊長に指示を出しに行った。

その姿は・・・まるで子供が戦の真似事をしている様で滑稽だった。

「ハル獣隊長！」

エドスが呼ぶと部隊の後ろから人影が宙を飛びエドスの前に着地した。

その姿は一見、黒ヒョウの様であるが、すぐに人の姿になった。

「メドル国に行き、城周辺の状況を確認、同時にアルセルデームとの国境の状況を探って来てくれ」
ハル獣隊長は軽く頷くと飛んで消えた。

見送るエドスは風の匂いに何かを感じていた・・・

メドル王国

メドル王国

メドル国は、魔人の国であるアルセルディムの隣国であるにも関わらず、

世界の中でも特に繁栄を重ねてきた国である。

そして、城はその象徴でもあった。

山の山頂に造られた城は、その頂きが雲を突き抜けるほどの高さがあった。

普段、地上からはその姿を見ることは出来なかった。

それを利用した城の防御は他に類を見ないほど強固な造りであり、幾つもの戦火を潜り抜けてきた証でもあった。

そして、その国王が絶対の信頼を置くのが大魔術師ドルガスであった。

ドルガスは魔術師の中でも特に対魔人術に精通しており、ここ数十年の平和の立役者でもあった。

また、隣国アルミアの信頼を得ており、反対にアルセルディムからは要注意人物とされていた。

今宵は満天の星の輝きが地を照らしていた。

ハル獣隊長はメドル国に入り、森の中を弟分のロージィと共に馬で駆けていた。

そして森の切れ目が近づくと速度を抑え止まった。

「ハル・・・」

「ああ・・・感じる・・・」

ロージイと目を合わせたあと、木々の間から遠目に……かすかに煙の上がつている城を見た。

「……すでに魔人と戦いを始めているのかも知れん」

「そうかも知れませんが、急ぎましょう！」

ハルとロージイが森を出て小高い丘に登り、そこから城の近くまで伸びている山脈に沿って進んだ。

月の光が城までの道案内をしてくれた。

やがて山の中腹にある城壁に近づくとロージイが叫んだ。

「ハル、あれは！」

見ると城壁の一部が大きく崩れ、城門は瓦礫の山と化していた。さらに所々で煙が上がり……モノの焼ける匂いを感じた。

二人は侵入出来そうな場所を探すため、崩れた城門に向かった。

「ハル、人の気配がありませんね……」

「ああ……何かがおかしい」

ハルが返事をしつつ城を見上げた時だった。

城の上空から何かが飛び出し、二人に向かって急降下してきた。とっさにロージイは剣を抜き構えた。

ハルは？と見ると慌てる事もなく落ち着いていた。

それは地面に着く直前に大きな翼が開き、ふわりと着地した。

大きな翼がマントに変わり人の姿に戻りながらハルに近づいて言った。

「ハル殿……ここはもう、もたない。いずれ魔人の手に落ちるでしょう……」

そう言うって持っていた腕輪を見せた。

「・・・そうか・・・エルード、御苦労だった・・・それで国王は？」
腕輪を受け取ると聞いた。

「だいぶ応戦したと・・・ですが国王そして大魔術師のドルガスも魔人の手に掛かり・・・」

恐らく国王、魔術師達は真っ先に狙われたのではないかと思われる。

王の部屋、周辺には多くの魔人と魔術師達の亡骸がありました。

しかし数だけ見ると魔人の方もかなりの痛手を負っていると見えません。

しばらくは攻め込んでこないものと・・・」

装飾の施された腕輪を強く握りしめて言った。
それはドルガスの金の腕輪であった。

「ドルガスまでも・・・そうか・・・」

エルード！このことを急ぎエドス参謀に伝えてくれ、
私とロージイはこれから城の様子を探る！」

エルードは頷くと翼を広げ飛び立って行った。

「ロージイ、これから城に入る、油断するなよ！」

「ああ！」

二人は馬を降り崩れた城壁に向かって走り出した。

城壁の内部に入るときには二人は二匹の黒ヒョウに姿を変えていた。

城の中は焦げた臭いが立ち込めていた。

二匹は薄暗い通路を進み一つ二つと部屋を渡り歩いた。

どの部屋もエルードの言っていたように凄惨な状況だった。

歩いている先に螺旋階段のある広間を見つけた。
だが階段付近には・兵、さらには魔術師までもが息絶えていた。
激しい戦いを思わせるように、壁は焼け剥がれており、
術によって石化、あるいは壁の一部となった兵達の姿があった。

「ここまで侵入されているとは・・・」

慎重に辺りを見回すと二匹はそつと階段を上がって行つた。すると
広い吹き抜けの広間に出た。

そこは彫刻が施された腰の高さほどの石壁で囲まれており、大きな
柱四本が、同じく彫刻石で造られた屋根を支えていた。

おそらくハレの日に使う場所なのだろう。

ロージイが北側の石壁に飛び乗り、その上を歩いた。

北側の石床は10メートル程、石屋根よりも月の明りを全面で受け
止めていた。

柔らかい月の光がロージイを照らしていた。

「ハル、ここからだと遠くにアルセルディムが見えます」

南側の石壁を見回っていたハルがロージイのもとに近づこうと歩き
だした時、

石屋根から黒い水がゆっくりと二人の間に降りてきた。

それは音を立てることなく静かに・そして人型に形を変え、その全
身が月の光に照らされた。

「ハル！」

叫ぶと同時にロージイが石壁から飛び降り、攻撃態勢に入った！

「魔人か！」

ハルも瞬時に何かを感じたのであろう、無意識の内に構えていた。その魔人は二匹を見て言った。

「ほう．．．獣人か？ここで何をしている？」

ハルは今までにない恐怖を覚えた。

それは真っ黒な体に、一つ一つが拳ほどの大きさの鱗のような皮膚、脈打つ筋肉、まるで意思を持つように不気味にうねる鎧兜．．

それを見てハルは黒ヒョウの姿から人の姿になるとロージイを見た。ロージイも感づいている．．．この魔人は危険だと．．そしてロージイを見て叫んだ！

「行け！！！」

ロージイは一瞬ためらったが、理解したのだろう．．

この絶望に近い状況を、そして必ずエドス参謀に知らせなくてはならない！という使命感を．．

ロージイは頷くと、迷うことなく石壁を飛び越えた！

《頼んだぞ！！ロージイ！！》

魔人は飛び降りて消えたロージイを目で追いながら言った。

「まあいいだろ、獣人の召使いは一匹でいい」

ニヤリと笑うとハルを見て言った。

「さあどうした？かかってこい、きさまにふさわしい首輪を付けて

やる」

ハルは両腰の短剣を抜くと攻撃態勢に入った。

「きさまに用は無い！！」

そう叫びながら魔人に飛びかかっていった。

その頃、エドス参謀率いる国境の兵士達は就寝前だった。

エドスは宿営のテントを出ると月を見た。

エドスに付き添っていたシエルも空を見た。

「エドス参謀？どうかされましたか？」

「・・・知らせが来た」

見ると星の輝く夜空を、鳥が旋回しながら飛んでいた。

それはテントから出てきたエドスを見つけると急降下してきた。

慌てたシエルがエドスの後ろに回った。

「エルード・・・」

ふわりと着地してエドスに近づき耳元で話かけた。

そばにいたシエルはオドオドしつつも会話を聞きたるうとしたがエルードに睨まれると大人しく下がった。

短く会話を終えるとエドスはエルードの肩に手を掛け頷いた。

エルードは会釈すると、すぐに飛び立っていった。

「シエル、すぐに出発する！準備を致せ！」

「は？」

シエルを睨んだ。

「はっ、はい！すぐに！」

あわててシエルは兵の元に向かいながら叫んだ。

「出発するぞー！急げー！」

エドスは馬を呼び、ヒラリと乗ると出発準備をしている兵に向かって声をあげた。

「準備出来た者から付いてこい！」

日の出が近づいた頃、国境の川を越えたエドスについて来られた者は50人ほどだった。

その一番後ろにシエルがいた。

シエルは馬に振り落とされまいと必死に手綱にしがみ付いていた。

エドスの部隊は森の手前の開けた草原に馬を止め、シエルの到着を待った。

シエルは・ふらふらになりながらもようやくエドスの前に到着したが、追いついたところで馬から滑るように落ちた。

「どうした、すっかりしろ」

「もうバテたのか？」

微笑する兵達に支えられながらようやく起き上った。

「たいした事は・・無いですよ・・さあ、行きましょう・・・」

ふらふらになりながら馬に乗ろうとした。

すると今度は馬が拒否してまた滑り落ちた。

看かねた兵の一人がシエルを抱えて馬に乗せた。

「ふう・・まだまだいけますよ・・」

「しょうがない奴だ、が・・その心意気は認めてやる」

エドスにポンツ！と肩を叩かれると、ビシッ！と姿勢を正した。

そのやりとりが一団を和ませた時だった・・・

なにやら遠くから声が聞こえた。

皆が声の方を見ると草原と森の境目から走り寄って来る者がいた。それが森の影から出ると朝日に照らされた。

「ロージィー!!」

エドスは叫びながら駆けだしていた。

事が重大だと咄嗟に理解したのだらう、黒ヒヨウのロージィに駆け寄り、すばやく馬を降りた。

「ロージィー!何があつた!?!」

ロージィは息を切らしながら答えた。

「・・・魔人が!ハルが私を逃がして・・・ハルが!・・・」

二人の回りを兵が囲み成り行きを見守った。

つい先ほどまでの笑顔は消えていた・・・

状況を皆が確認するとエドスが言った。

「その魔人、アルセルディムの者では無いな・・・」

皆が神妙な顔つきになった。

そこへ上空からエルードが降り立った。

「エドス参謀!あの魔人がすぐそこまで来ています!ハル獣隊長も一緒です!」

「なんだと!」

皆、一斉に森の方を向いた。

温かかった風が冷たくなるのを感じ、その風が止むと・・・今度は空気が重くなったような気がした。

すると森が一斉にざわつき始め、大きな音をたて、まるで生きているかのごとく暴れた。

それらが突然、ピタッ！つと、止むと・・・

黒い水が森から川のように流れ出し・・・一団に向かってきた。それを見たエドスが叫んだ！

「牙の陣形をとれ！！」

兵が一斉にエドスの後方で陣を組んだ。

その陣形は三つに分かれ、それぞれが三角形をしていた。続けざまに叫んだ。

「エルード！こちらに向かっている兵をアルミアに戻せ、我々だけで倒す！」

エルードはすぐに翼をひろげ飛んだ。

「アルミアの勇者達よ！油断するな！」

兵たちは馬から降り、盾の壁をつくった。

そこへ流れてきた黒い水がエドスの手前で止まり大きな固まりとなった。

それを見たエドスが剣を抜き構えた。

すると黒い水の固まりが上部から流れ出すと・・・中から魔人とハルが現れた。

「ハル！」

エドスの脇にいたロージイが叫んだ。
それを見たエドスがロージイを剣で制した。

ハルは黄金の鎧を身に付け、首には赤く光る輪が掛けられている。
ハルを見ながら魔人が言った。

「先ほど良い召使を見つけてな・・・だが、やはり二匹でないと様にならん。

おまえ、もう一匹知らないか？」

言い終えるとエドスを見た。

「きさま、アルセルディムの魔人では無いな・・・ここへ何しに来た！」

エドスが剣を魔人に向けながら言い放った。
すると魔人がニヤリと笑みを浮かべて答えた。

「それを知ってどうする？すぐに死が待っているというのに・・・」

魔人が両手を広げると胸の辺りに白い煙が円を描きだした。
それを見ていたロージイのプライドは我慢できなかった・・・

ハルとロージイ

ハルとロージイ

ハルとロージイは黒ヒョウの獣人で、ハルはロージイより三つ年上であつた。

互いの両親はアルミアの海に近い田舎町で暮らし、

ハルは幼いころから狩りが得意で、狙った獲物を取り逃がす事が無かつた。

そんなハルと何時も一緒に行動を共にしていたロージイは、ハルを‘兄さん’と呼び、慕っていた。

ある時、いつものように狩りをしていると、

切り立った岸壁から大きな船が座礁しているのが見えた。

二人は近づいて船に乗り込むと、話し声のする方に向かつた。

見つからぬように船内を移動していくと、大きな荷が幾つも置いてある部屋に出た。

その中の幾つか積み上げられている檻の前で言い合いをしているのは・・・

10人ほどの魔人兵だろうか？

見ると檻の扉が【二つ】空いていた。

「お前達が寝ていなきや、こんな事にならなかつたんだぞ！」

「なにを言う！こいつが逃げたのを見ていなかったからだろっが！」

船が座礁した事で揉めているのだろうか？

なかなか収まらない言い合いの最中、

一人の兵が《ネズミ》の様な生き物を捕まえて来た・・・

「おい、そこまでしておけ！あとの一匹、何が何でも探し出せ！」

それを聞いた兵達は大人しくなると、散らばって行った・・・

「兄さん、あれ・・・」

「・・・ああ、俺達と同じ仲間だ」

「・・・魔人の国に連れて行かれるの？」

「そうみたいだな・・・」

「じゃあ、助けないと！」

「まて！・・・俺たちじゃ敵わない相手だ」

「でも・・・」

「・・・ロージイ、今、見張りは一人だ・・・」

ハルはロージイの耳元で囁いた。

「・・・分かった、上手くやるよ」

「頼んだぞ！」

ロージイは頷くと駆けて行った。

ハルは物陰からその兵に近づいていった。

「・・・まったく、つまらん役目だ・・・」

兵は掴んでいた《ネズミ》を見ながら檻の中に入れると鍵を掛けた。
《ネズミ》は、出せ！と、言わんばかりに檻を叩いていた。

「・・・暴れる、どうせ短い命だ!」

兵がそう言いながら睨みつけていると、ドーン!と、船内から爆発音が聞こえた。

「なんだ!」

立て続けに爆発音が聞こえると、その場に残っていた兵達も全員走って行った。

《よし!今のうちだ!》

ハルは人の姿になると檻の扉を開けて回った。

「今のうちに反対から逃げてくれ!」

それぞれの動物達は、他の檻を開けながら逃げて行った・・・

「きさま!何をしている!」

突然、後ろから怒鳴りつけられたハルは・・・その場に固まった。

ハルは最後の扉を開けると、

「・・・大丈夫だから逃げてくれ」

そう言つてタヌキを逃がした。

「・・・きさま、若造のくせにやってくれるじゃないか!?・・・生きて帰れると思うなよ!」

ハルは振り返りつつ、黒ヒョウに姿を変えた。

すると、その兵もハルと似たような猛獣・・・ではあるが、ハルよりも数倍の大きさで・・・

黒い体毛は鎧に変わり、その尾は別の意思を持ち・・・足元は沈んでいた。

《 まともに戦っては・・・ 》

ハルは突進してきた魔獣をかわすと、檻に突っ込んだその後ろの尾に向けて、
口から火炎を放った。

その尾は似たようなモノを吐き出すと、それでかわした。

瓦礫の中から身を出した魔獣は、再び突っ込んで来た！

ハルは続けざまに火炎を放ったが、

魔獣は、それをかわす事無く受けて突進してきた！

ハルは咄嗟にかわしたが・・・伸びた尾がハルを捕らえ、巻き付いた。

「 なにつ！ 」

ハルは身動き出来ず、魔獣に引き寄せられた・・・

「・・・獣人の分際で我らに齒向かうとは・・・見せしめにその皮を剥いてくれよう！」

魔獣は尾を伸ばし、宙でハルを締め上げた。

「 ゲグツ！ 」

ハルは意識が遠のき、覚悟をしたときだった。

何かが飛んできたかと思った瞬間、尾が切れた。

ハルは地面に叩きつけられると意識を戻し、何とか構えをとった。

「・・・何奴！」

二人が見上げる先に一匹の鳥がいた。

「・・・逃げていた奴か！わざわざ殺されに戻って来るとは・・・
馬鹿な奴だ！」

切れた尾が魔獣に戻ると・・・それは翼を持った魔鳥に姿を変えた・
・

大きな翼を羽ばたかせると、ゆっくり上がっていった。

「逃がしはせん！覚悟しろ！」

魔鳥は大きく鋭い爪を伸ばし、そこに大きな火炎玉を造った・

それを、翼を持った獣人めがけて放った・・・が、
それを見事にかわすと火炎玉は船室の上部を破壊して空高くに消えていった。

獣人はその穴から外に飛び出すと、魔鳥もあとに続いた・

ハルが甲板に出ると、海岸に逃げた獣人達がロージイと共に居た。

「兄さん！」

ハルは上空の二匹の戦いを見ながらロージイの元に駆け寄った。

「ロージイ、怪我は無いかな？」

「ええ、兄さんの言われた通りに、魔人達を船尾に閉じ込めた後、

爆破させました」

「良くやってくれた」

ロージィはその言葉に頬を上げた。

「・・・ところで、あなた達はどうして・・・」

すると一匹の老犬が歩み寄った。

「はい、我々は小さな漁師街に住んでおりました。

そこに突然、奴等が来て・・・街を破壊し・・・

なんとか女、子供は逃がしたのですが・・・我々は捕まってしまいました。

船の中で聞いたのですが、どうやら魔人達は捕えた者達を、密偵用に改造すると言っていました・・・」

「そうだったのですか・・・あの鳥は・・・」

上空の二人の戦いは・・・さらに激しさを増していた。

「はい・・・エルードと、いいいます。

まだ若いのですが、戦いにおいてあの子に勝る者は、私の知る限りでは・・・」

エルードは海岸に降り立つと、魔鳥も続いた。

「・・・逃げ足の速さだけは認めてやる、だが次で終わりにしよう」

魔鳥は上空に向けて、口から勢い良く水を噴き出すと・・・

それは針の雨となりエルードを襲った！

エルードは広範囲に渡って降り注ぐ針の雨に逃げ道を失い、

翼を盾にしてそれを受けた。

「・・・ぐっ！・・・くっ！」

数本の針を受けたエルードの翼は傷つき、
今までのように戦える状態では無くなってしまった。

「・・・おおっ！エルード！」

仲間が心配そうに身を乗り出すが・・・とても助太刀できそうな者は居なかった。

「・・・観念しろ、これで楽にしてやる！」

そう言い放つと魔鳥は先ほどよりもさらに大きな火炎玉を造った。

「これで終わりだ！」と、撃つ瞬間、魔鳥の顔面に《ネズミ》が噛みついた。

「ぐわっ！こいつ！・・・」

魔鳥は慌てて元の人型の魔人に戻り、それを掴むと顔面から引き剥がした・・・

「・・・ぐうっ！・・・やってくれたな・・・」

魔人の左目から鮮血が溢れていた。

「・・・くたばれ！」

魔人は両手でネズミ？を握りつぶしにかかった。

「ヂュウツ！」

苦しそうに悶えたその時、魔人の背後からロージイが飛びかかり、首を捕らえた。

「ガアッ！・・・きさまら！」

魔人はネズミ？を投げ飛ばし、今度はロージイを引き剥がしにかかった。

「くそっ！・・・このっ！」

ロージイの首を掴み、引き剥がそうとした時だった。

「離れる！」

ロージイはその声に瞬時に反応をすると魔人を蹴飛ばして飛び退いた。

その瞬間、 シュッ！ っと、エルードが魔人の横をかすめていった。

風を受けた魔人の首がゆっくりと落ちていった……………

「いずれまた会うこともあるでしょう……………」

捕らわれていた仲間たちは、ハルとロージイに再開を約束して家族の待つ土地に帰って行った……………

「兄さん…………俺、もっと強くなりたい」

「ああ、俺もだ・・・さあ帰ろう！」

夕焼けを見ながら二匹は駆けて行った・・・

ロージイの怒りは頂点に来ていた！

ハルがよいように操られている事・・・

そして何より、魔人の《飼い犬》のような発言に！！！！

ロージイは己のプライドに従った。

その場から魔人めがけて飛び出すと空中で人の姿に変え、
剣を抜き渾身の力を込めて切りかけた！

《ザクッ！》

・・・ロージイの体は宙に浮いたままだった。

魔人の肩の辺りから体を覆うように、黒い水の盾がロージイの剣を
呑み込んでいた。

そしてそれが大きな固まりに変わり、徐々にロージイも呑み込まれ
ていった・・・

「そこまでだ！」

エドスが馬を降り、魔人に歩み寄って言った。

「二人を開放しろ！お前の望みは何だ！」

魔人は、息の切れかかっているロージイを目の前に放り出すと言った・・

「望みだど？この世界は近々魔人が支配する。
その前に人間共と獣人を消してしまいたい、それだけだ」

「そうか・・ならば最後に一つ教えてくれ。
アルセルデームを滅ぼしたのはお前か！？」

魔人が高笑いをして返した。

「・・最後か？いいだろう、教えてやる。

確かに我々の送り込んだ仲間がアルセルデームを滅ぼした。

だが、そいつが魔王を倒した後に、何者かによってそいつ自身も殺された・・・

そこが謎だ。

なぜならこの世界に我々を倒せる者など存在しないはずなのだ。

それで私が・・まあ、調査？のために遣わされた・・分かったか？」

エドスはロージイを抱き抱えると、ニヤリと笑みを浮かべて言った。

「そうか、お前のような奴を倒せる者が・・この世界に存在するのか！？」

ならば・・それは我々、獣人かも知れないな」

「なんだと？」

エドスはロージイを馬に乗せると、皆に向かって叫んだ！

「仲間達よ！遠慮はいらん！自分の守るものの為に己を開放し、存分に戦え！」

「オオッ！！」

エドスが魔人に振り向くと・・・

その姿は、全身の毛が針の皮膚で覆われた鎧獣に変わっていた・仲間も同様に、それぞれの獣の姿に変わっていた。

それを見た魔人は吐き捨てるように言った。

「それがどうした？」

魔人の体から黒い水の固まりが糸を引くように無数に出てくると、その固まりが魔人の顔に姿を変えた・その固まりの一つが言った。

「遠慮はいらんぞ！かかってこい！」

エドスは身構えると叫んだ！

「我々、獣人の力を見くびるなよ・・・一の陣！」

エドスの右後方の三角の陣が一斉に飛びかかった！

宙を舞った獣人達は同時に火炎を放った！

それを魔人は、固まりの一つが盾に変化して防いだが、周辺は炎と煙で覆われた・

視界が利かなくなっている魔人に対し、
地を駆けた獣人達は数体が合体し、漆黒の鎧兜を身に付けた鎧獣と
なり、

炎と煙の中へ飛び込んで行った！

「くらえ！！」

鎧の一つが巨大な斧に変わり、瞬時に振りかざすと魔人をなぎ払った！

《ドッパン！》

魔人が胴から二つに分かれた！

「ぐっ！！・・・こんなやつらに！！・・・」

魔人は液状になり再び黒い水が地に流れた・・・

「やったか！？」

控えていた獣人が言った。

すると黒い水は波打ち始め、

突然！無数の槍に姿を変え、勢いよく飛び出すと獣人達に襲いかかった！

宙を舞った獣人達のはろうじてかわしたが・・・翼を撃ち抜かれた。
その撃ちぬいた槍が網に形を変え、

反転して獣人を包み込むと・・・そのまま勢いよく地に叩きつけた！

漆黒の鎧兜を身に付けた鎧獣は多少の傷を負ったものの・鎧が防いだ。

「ぬうう！油断するな！次が来るぞ！」エドスが叫んだ！

黒い水が再び固まりとなり、魔人が姿を現わした。

「なかなかの攻撃だった、次に期待するぞ・・」

不吉な笑みを浮かべながらエドスを見た。

「そう言っていてられるのも今のうちだ！

第二陣！やつを抑えこめ！これで終わりにしてやる！」

左後方の三角の陣が駆け出すと、魔人を囲んだ・・

「六方陣！」

六人の獣人の全身が輝きを放ち、星の形の円陣を描いた。
その中心の魔人が幾つもの回転する星のリングに囲われた・・

「・・・なんだ？その程度か！？」

魔人が両手を広げ、星のリングが徐々に小さくなっていくその圧力を制すると、

徐々に押し返し・・リングを広げていった。

それを見たエドスは叫んだ。

「十二方陣！」

エドスの後方にいた最後の部隊が飛び出し、
六方陣の外側にさらに大きな円をつくった。

「魔人よ、油断したな！これで塵にしてやる・・・」

呪炎魂消！！！！

十二人の様々な攻撃が魔人に集約された。

「なにっ！・・・ぐああ！何だ、これは！・・・」

魔人の予想に反して体が溶け出し、蒸発して消え始めた・・・

「物理的な攻撃が効かぬのなら・・・

この術は効くだろう・・・いま楽にしてやる！」

エドスの体が光り始めた・・・

「ぐうっ！・・・たしかに甘く見ていた！・・・
だが忘れてはいないか？こいつの存在を！」

魔人の目が赤く光った・・・

すると、輪から少し離れた所にいたハルの首輪が赤く光った！

ハルは突然走り出し、囲いを作っている獣人に向けて口から雷を放った！

それは・・・輪、全体に雷が轟き、

それを受けた獣人達は、痺れてその場に倒れた・・・

術の効力が切れたその瞬間！

魔人の体が回転し、術を弾き飛ばした！
そこへ走り寄ったハルが身を寄せた・

「いい子だ！それでいい・

今度はこちらの番だ、確かに舐めてかかっては命とりになりそうだ・

・

一切の手加減はせん！皆殺しだ！」

体を修復した魔人が胸の辺りで両手を合わせ、
ゆっくり手を広げると真っ赤な雷の光を覆った・

エドスが叫んだ！

「今一度！呪炎魂消！俺がとどめをさす！」

ふいをくらった獣人達が起き上り一斉に術を放った！

再び魔人とハルが術にかかった・
が、ハルの黄金の鎧が真っ赤な雷の光を放つと、それらを跳ね返し続けた。

「まさかこいつが役に立つとはな・」

魔人がハルの黄金の鎧をさすりながら言った。

そして魔人がエドスを凝視すると、真っ赤な雷の輪が高速で回転を
始め、

徐々に拡大していった・

内側に円を囲んでいた六獣人は赤い雷の輪が近づくと後ずさりした・
・

魔人は両腕を広げ、拳を握り、力を込めると・・・別に両腕が肩から生えてきた！

そして胸の中心で両手を合わせ、腰を落とし、力を込めると・・・真つ赤な雷が勢いよく広がった！

術をかけていた獣人達は逃げる間もなく、雷をくらい吹き飛んだ！

「覚悟しろ！」

魔人はエドスを睨み、言い放つと・・・合わせていた両腕を少し広げた。

そこには黒い水の固まりがあつた。

魔人が一気に両腕を押し出すと・・・黒い水の固まりがエドスに向かって飛び出した！

エドスが避けようと動いた時、黒い水の固まりが大きな網になり、エドスを包んだ・・・

「なにっ！」

さらに網が液状に変化すると・・・エドスは呑み込まれた。

「ぐっぐっ・・・」

先のロージと同じように・・・黒い水に取り込まれて身動きが取れなくなった・・・

「どうだ！苦しいか・・・だが安心しろ！いま楽にしてやる！」

魔人の両腕が天高く伸び、その手の形が鋭利な剣に変化した！

「くらえ！」

それはエドス目がけて勢いよく放たれた！

「ぐわっ！！」

突然、魔人の顔に小柄な獣人が飛びついた！

それは両足で首を絞め、両手の爪が顔を捕えていた！

「エドス参謀！今です！」

小柄な獣人が叫んだ！

エドスは黒い水の中からそれを見て・・・ニヤリとした。

全身の皮膚を覆っていた針が白い光を放つと、

体を丸めたエドスが黒い水の固まりの中から勢いよく魔人に向かって飛び出した！

それを見た魔人の顔を覆っていた獣人は、当たる直前に飛んで逃げた！

「なっ！！な・ん・だ・と・！？」

魔人の胸にエドスが埋まっていた。

視界を奪われていた魔人は反応できなかった・・・

そしてエドスが低い声で言った。

「術が効かぬのは、おまえだけではない！
そしてこの技は・・・魔人に効くらしい！」

エドスを覆っている無数の針が瞬時に伸びた！

太く、そして長く伸びた針は、魔人の体を破壊した・・・

エドスの光を受けた白黒模様の水しぶきがボタボタと落ちていき、それは徐々に蒸発し、消えていった・・・

「終わったか・・・」

傷ついた獣人達がエドスの元に集まってきた。

「参謀、やりましたね」

「今回は危なかったですよ」

各々、笑顔が戻りつつ声を掛け合った。

そこへ小柄な獣人が割り込んで言った。

「エドス参謀！ナイスな《タイミング》でしたでしょう？」

「シエル、今回に限っては、良い働きだった。たまには褒めてやらんとな！」

「そんな～！毎回、お役に立っているではないですか」

獣人達の笑い声が響いていた・・・

「今回は預けておく！だが次はないぞ！楽しみに待っている！」

川を背にしたハルが獣人達に叫んだ！

「ハル！」

獣人達が見ると、ハルを覆っていた黄金の鎧は消え．．いつものハルに戻っていた。

しかし目は赤く光ったままだった．．

ハルは振り返ると川に向かって走り出した！

「エルード！」　すぐさまエドスが叫んだ。

エルードがすかさず飛び出すと、ハルに近づいていった。

ハルはエルードを見ながら不気味な笑顔を浮かべると．．

そのまま川に飛び込み、川と同化して消えていった．．．．．

エルードはハルが消えた辺りを探したが．．とうとう見つからなかった。

そこにエドス達が集まってきた。

「エルード！」

「駄目です！川の水と同化して消えました。」

「そうか．．．どうやら一筋縄ではいかないか．．．」

「くそっ！」

悔しがる獣人達にエドスが言った。

「一度アルミアに戻る！このままでは終わらせん！
態勢を整えてから奴らを叩く！」

「オォー！！！」

獣人達が声を挙げた。

見上げると日は高く昇っていた・・・

第2章：ミンの剣王

第2章：ミンの剣王

ルードシアとミンの国境には二つの山脈が双壁を成していた・

その谷の山深い所に、小さな集落があった。

集落とはいっても数件しかなく、家と家との間隔は徒歩で半日かかる。

その一つに、刀鍛冶師のシンの家があった・

早朝、シンが旅支度をしていた。

「では行ってくる。また四・五日ほどかかると思っがよろしく頼む。ランは何処にいる？」

「はい、ランは相変わらず剣術修行です。今日はあなたが街に行く日だって伝えてあるのに」

「そうか・・ではレイ、ランを頼む。

あいつは自分の技に絶対の自信を持っているが・・それだけでは世の中を渡ってはいけない。帰ったらその事を教えてやらねば」

シンは大きな荷を背負うと家の外に出た。

「それでは頼んだぞ！」

「はい、気をつけて」

レイは手を振りながらシンを見送った。

シンは獣道を歩いて行き、日の高く上がった頃・・・
山を削り洞窟と化している一軒の家に着いた。
その穴に向かって呼んだ。

「おゝい！アキムゝ！いるかゝ？」

アキムとは・・・鎧兜、装飾品などを作っている職人で、シンの幼馴染でもある。

シンの刀剣の鞘は、アキムに作ってもらっている。

道窟の中から返事がした。

「ああゝちよつと待ってくれゝ今行くゝ」

少しすると、ガシャガシャと音を立て・・・何やら大きな荷物を抱えて奥から出てきた。

「ごめん、ごめん、待たせたな！」

「いや、それにしても今日は多いな」

「ああ、しばらくここを離れる事にしたんだよ」

「どうして？」

「カズチの店を手伝う事にしてな、何だか忙しいから暫く手伝って

くれって」

「そうか、なら少し持つぞ」

そういうとシンは荷を一袋抱えた。

「ああ、すまねえ、これでまとまった金になるからよ、明日は一杯やろうな！」

二人で大きな荷を抱えると共に歩き出した。

「そついやーランチちゃんは幾つになった？」

「ああ、十七になった。最近は自信たつぷりに勝負してくれって言ってくる」

「そうか、大きくなったな。このあいだ見掛けたけど、だいが大人っぽくなっていたな。何だかレイの若いころに似てきたよ。」

「ありや男は・ほっとかないね」

「そうか？ だけどまだまだ世間知らずだ・・・」

小川を幾つか越え、小高い山を越えると雑木林の中の道らしい道に出た・・・

近くにだいがひなびた社を見つけると・・・日暮れも近づいていたので「今日はここいらで泊るか？」と、アキムがシンに聞いた。

「そつだな、じゃ食い物を取ってくる」

シンは荷を下ろすと、荷の中から長くて細い・腕の長さほどの木の箱を背負った。

「ああ、火・熾して待っているよ」

シンは軽い足取りで山に入って行った・・・

小さな小川に着いた頃、日が沈みかけていた。

夕陽に照らされた小さな滝の上に一頭の鹿が水を飲んでいた。

「さてと・・・」

シンは呼吸を整えると、ふんっ！と両手を合わせ、ゆっくりと手を広げていった。

すると、背中の箱から一振りの剣が手の動きに合わせて出てきた・・・

剣はシンの手の動きに合わせて自在に宙を舞った・・・

そしてシンが鹿に向かって腕を指した瞬間、剣が鹿の首を貫いた！

シンは仕留めた鹿に近づきながら剣を戻した。

（！！・・・誰がいる！？）

シンは悟られないように気配を伺いながら獲物を担ぐと、ゆっくりとアキムの待つ場所へ歩きだした・・・

日が完全に沈み、月明かりの森の中を進むと・・・
大人一人ほどの高さの場所を飛び降りた。

（あれ！？消えた？・・・）

木の上に身を隠して見ていた人は、シンの姿を見失った・・・
気配を殺しながらゆっくり降りていくと・・・

慎重に辺りを伺いながら、消えた所に近づいた。

（ここを降りて行っただのね・・・）

上から覗き込むと、行き先の気配を探してみた・・・
その時、はっ！と後ろに気配を感じた。

ランは振り返る間もなく、腕を極められ口を塞がれた。

「・・・んっ！・・・」

「静かに！ラン！ここで何している！？」

シンは・・・ゆっくりと口から手を離すとランを見た・・・

「ああっびっくりした〜！気付かれないと思ったのに・・・」

シンの顔を見ると少し安心した顔で言った。

「バカなことをして、レイが心配するだろう？」

「母さんには言ってきたわ、駄目って言われたけど。
それより、さっきの技は何！？私にも教えて！」

ランは目を輝かせて聞いた。

「見ていたのか？・・・でもこれはまだランには使いこなせない、まだまだ修行が必要だ・・・

しょうがない、夜が明けたら帰るのだぞ！」

「ええっ！私も連れて行つて！もう退屈でしょうがないの！」

「・・・駄目だ、約束だ！」

渋々ランはシンに連れられて・・・アキムのもとへ向かった。

すでにアキムは火を熾して待っていた。

「アキム、待たせたな。客が一人増えた」

シンの影からランが顔を出した・・・

「へへっ、どうもアキムさん、見つかったやいましたっ！」

驚いた顔でアキムが言った。

「ランちゃんじゃないか！？どうして!?!」

「まあ、色々ありまして・・・」

「まあ、どうしたかは知らないがランちゃんなら大歓迎だ！

飯食べるだろ？待ってな、いま美味いの作るから！」そういうと支度にかかった。

「それにしてもランちゃん、綺麗になったな」

俺がもうちょっと若かったら嫁に欲しいくらいだよ、

誰か意中の人はいるのかい？」

「いませんよ、街に行けばそういう人がいるかもね、でも私、父さんよりも強い人じゃなきゃイヤだな」

「ランちゃん、そりゃ難しいな・・シンより腕のたつ人はなかなかいないぞ？」

「わしもシンとは長い付き合いになるが・・そんな奴は見た事ないな」

それを聞いたシンは笑みを浮かべて言った。

「世の中、強い人は幾らでもいる。

確かに身を守る強さも必要だが、人としての強さ、優しさを持つていないやつは世の中渡つてはいけない。

ランはまだまだ目先の強さを求めすぎる、それしか見えていない。まだまだ色んな事を学んでいかなきゃいけない・・」

朝、ランが目を覚ますと、二人は食事をしていた。

「ラン、これを食べたら家に帰るんだ・・」

シンが器を渡すとランが言った。

「私も行く！もっと色んなもの見たいし、知りたいもの！」

「・・・次の時は連れていく、だから今日は帰りなさい」

「駄目って言っても付いて行くから、仕事の邪魔はしないわ！」

「まあまあ二人とも、ランちゃん、飯食べちゃいなよ。シンも考え
てくれるから・・・」

出発の支度が出来ると、二人は荷を持った・・・

「ラン、街道に出たら・・・そこから家に帰りない。
この次は必ず連れていくから」

ランは返事をしなかった・・・

ふてくされた顔をしながら・・・歩きだした二人について行つた・・・

街道が見えた頃、アキムがランの機嫌を取って話かけた。

「ランちゃん、シンも次は必ず連れていくって言っているから・・・
今回は家に戻った方がいいよ。
レイも心配しているだろうし・・・」

それから街道に出た。

人通りは無く・・・鳥の鳴く声だけが聞こえた。

「ラン、ここでお別れだ・・・気を付けて帰るのだぞ」

ランは、むっ！とした顔で答えた。

「・・・どうしても駄目なの!？」

「・・・次は必ず連れて行くから、言う事を聞いてくれ」

ランの肩をたたくと諭すように言った・

そこにアキムが口を挟んだ。

「シン！あいつ何だ！？」

シンとランが、アキムの見ている方を向いた・

「助けてくれ！！」

街道の先から男が一人・・・着の身着のまま必死にシン達のもとに駆けてきた。

何事か？と、シンが荷を置いて、男のもとに駆け寄った。

「どうした！」

「こっちに来る！・・・化け物が！助けて！・・・早く逃げないと！」

「落ち着け！何があつた！」

男は何かに脅えた様子で「あんたたちも早く逃げろ！」と言い放つと、

すぐに走り出した。

「おい！まで！」

走り去る男の脅え方は尋常ではなかった・

「シン！どうした！」

アキムとランは、すれ違いに走り去る男を見ながら走り寄って聞いた。

「分からない、何かに脅えていた・・・」

シンは男を見送りながら答えた。

「見て！」

ランが街道の先に現れた二人の女性を見つけた。

「その人！助けて・・・」

近づいて来る女性は・・・何やら街の客取りの格好をしたこの辺りには似つかかわぬ姿だった・・・

それを見たアキムが前のめりになって言った。

「いやゝいい女だなゝこんなに綺麗な人は見たことないぞゝ！」

三人の手前で、女が肌蹴た所を繕いながら言った。

「良かった・・・追われているのです・・・」

シンは・・・女の首辺りが肌蹴ている所に目がいった・・・首の動脈が少し動いたのを見逃さなかった！

アキムとランを自分の後ろに下がるように手で指示した・・・

「誰に追われている？・・・それに汗をかいていないが？」

シンの口調が変わった・・・

その変化に気付いたアキムとランは咄嗟に身構えた！

「そう？・・・気付かれたのではしょうがないですね・・・」

女の手が瞬時に伸び、シンの首を掴んだ！

「んあっ！」

シンの体が浮いた・・・

「父さん！」

「シン！」

見ると女の姿が変化していた・・・

蛇のような顔つき・・・体は一部が蛇のようではあるが・・・

女性の体を留めており、足の辺りはムカデのようであった。

シンは掴まれた腕から逃れようともがいた。

それを見たランが、シンを飛び越えて切りかかった！

気付いた女がランに向けて、もう一方の腕を伸ばした！

ランはそれを剣で払うと、幾つかの小さな球を、間髪入れずに女の顔目がけて投げた。

両手が伸びていた女は、球を硬い頭の頭部でうけた・・・

シンはそれを見逃さずに腰の剣を抜き、掴まれている腕を切った！

「があっ！……やってくれるじゃないか！」

女は切られた腕を戻すと・体に取り込んだ。

「ひどいことするね〜！こうなったらみんな食ってやる！」

顔に似合わず・色っぽい声を出した。

シンは腕を外すと、投げ捨てて言った。

「……きさまら魔人か！？なぜこの国にいる！」

「魔人！？・父さん！なにそれ！？」

ランは剣を構えながらシンに近づいて聞いた・

シンは首をさすりながら言った・

「世界には・我々人間の他にも違う種類の人がいる。

ただ魔人だけは悪であり、それ以外の何ものでもない・・とも聞いた」

すると、もう一人の・まだ人の姿の女が言った。

「へえ〜いい話じゃないか、こんな所にまで知られているとは。魔人ね〜？」

でもさっきの街の奴らは何にも知らなかったようだね〜
おかげでいい食事にありつけたよ。

まあ、一匹逃がしたけど、あとの楽しみにしておこうじゃないか」

「なんだと！じゃあ街の人達は！？」

アキムが声を荒げて聞いた。

「もう消化したんじゃないかあ．．ないのかね」

蛇の女が腹を復元した手で摩りながら言った．．

「じきにお前達も同じ運命さゝ覚悟おしっ！」

再び蛇の手が伸びると、シンとランに襲いかかった！

それを互いにかわすとシンはアキムに言った。

「アキム！千術箱を！」

「分かった！」

アキムはシンの荷を取りに駆けだした．．

それを見た後ろの女が突然．．蜘蛛のような顔つきの姿に変化して口から白い糸のようなものを吐き出した！

それはアキムとの距離を一気に縮め、アキムの背に張り付いた！

「なっ！．．」

アキムは抵抗出来ずに勢いよく引きずり戻されると．．

蜘蛛女が口を大きく開いて待ち構えた！

「まずい！」

シンが白い糸に切りかかった・・が、切りかかろうとした時、片足を掴まれた！

「あんたは私の獲物だよ！」

蛇の手に捕まると、態勢を崩して倒れた。

シンは引きずられるのを必死に抑え、

握っていた剣の柄を下に持ち替えると力を込めて剣を振りおろした！

《ザクツ！！》

意思を失ったアキムの体は転がって、シンにぶつかった。

剣を失ったシンはアキムを掴んだ。

「アキム！ランを連れて逃げろ！」

シンは蛇の女に引き寄せられながら叫んだ！

「舐めた事をしてくれるね〜！逃げられると思っているのかい！？」

蜘蛛の女が口から無数の糸をチヨロチヨロ出しながら近づいて来た・

少し離れた所にいたランは、アキムが取りに行った千術箱を再び取りに駆けだした！

「何をしようってんだい!？」

蜘蛛の女がランに糸を放った!

ランは飛んでかわすと・・・

荷の中に昨日シンが使っていた千術箱を見つけ、それ目がけて飛びついた!

が、同時に糸がランの胴から両足を囲うように捕え、地に叩きつけた・・・

「ラン!」

シンは引きずられながら叫んだ。

蜘蛛の女はランを身動きさせぬまま・・・引きずり寄せてきた。だがランの両手にはしっかりと千術箱が掴まれていた・・・

シンを手元に引き寄せた蛇の女は言った。

「姉さん、先にこいつ食ってもいいかい？」

「ああ食っちゃいな・・・そいつもあんたにやるよ!」

シンを掴んで離さないアキムを見て言った。

二人のやり取りを聞きながらランは隙を見て千術箱をシンに向かって投げた!

「父さん!!」

届いて!と、必死の願いを込めた千術箱は、アキムが掴んだ!

「シン!!」

アキムがシンに手渡した瞬間！・・・蛇の女の手が千術箱を奪い取った！

「・・・そんなに大事な物なのかい？」

「ああ！・・・」

ランは絶望と、自身の無力感を感じた・・・

「姉さん、これ大事な物らしいよ。どうする？」

すうーっと蛇の手が伸び、蜘蛛の女に渡した。
それを少し眺めて言った・・・

「まさかこんな木の箱で私達をやるうってんじゃないだろうね」

二人が笑いだした。

「これじゃ・・・私らの世界になるのも時間の問題だよ
こんな物で殺りあおうってんだから」

言いつつ蜘蛛の女が千術箱を後ろに投げ飛ばした！

「くそっ！！」

アキムは、拳を地に叩きつけた・・・

シンはランを見た・・・

ランも無力感を感じた目でシンを見つめた・・・

「ラン、すまない・・・」

「・・・父さん」

二人の会話を聞いていた蜘蛛の女が言った。

「あらまあ？泣けてくるじゃないかい？」

「姉さん、さつさと食って・・・さつきの男、食いにいこうよ！」

「そうだね、それじゃ！」

蜘蛛の女が大きく口を開けた！

ランは何とかして引き寄せられまいと必死に地面にしがみ付いた・・・

「ラン！」

「ランちゃん！」

二人の声も空しく・・・蜘蛛の女の足もとまで引き寄せられた・・・その時！

《バシュ！》

青い光が一閃！蜘蛛の女を貫いた！

「なに！」

一瞬呆気にとられた蛇の女が・・・光の元を辿った。

「当たった！」

遠目から銃を構えた人が叫んだ！

その人は続けざまに蛇の女に銃口を向けた！

咄嗟に蛇の女はシンを持ちあげると盾にした。

「なんだ！きさま！」

横で蜘蛛の女が蒸発していった・・・

「姉さん！」

次の瞬間、蛇の女はシンを離れた・・・

「なに！」

蛇の女の腹から剣が突き抜けていた！

「お返しだ！」

アキムが剣から手を離すと・・・後ずさりした。

「父さん！これ！」

逃げだしていたランは千術箱を持ってシンに駆け寄った・・・

「ラン！すまない！」

シンはランを掴むと蛇の女から離れた。
そしてすばやく千術箱を背負うと手を合わせた！

《はあゝっ！！》

千術箱が金色の光を放ち、剣が幾つも連なって勢いよく飛び出した！
それは宙で螺旋の花を描くと中心の剣が蛇の女に向いた。

「すごい・・・！」

ランはその美しさに見とれた・・・

「なにを〜！」

蛇の女に刺さっていた剣は溶け出し、
身震いを繰り返すと・・・大蛇に姿を変え、口から大量の炎を放った！

それに対しシンは腕で合図すると、剣は一斉にシンとランの前で盾となった。

その炎を弾きつつ、次にシンが合図をすると剣は針のように飛び出し大蛇を囲んだ。

「私に剣など効かぬわ！」

大蛇の鱗の一つ一つが異様に膨れあがると硬い皮膚に変わった・・・

シンは大蛇に叫んだ！

「ただの剣なら効かないだろう！だが、これはただの剣ではない！」

《はあゝっ!!!》

シンはさらに力を込めると、一つ一つの剣は赤黒い雷をまとった・

「そんなもの！効かぬわゝ!!!」

大蛇は、どす黒い炎を吐き出した！

だが赤黒い雷をまとった剣は空に向けて螺旋に回転し、
天空に、どす黒い炎を送り出した・

「なんだと!」

「覚悟しろ!」

シンが合図をすると・・・

回転する螺旋の剣先を大蛇に向け、

竜巻の如く・・・その輪が一気に縮まっていった!

《ぐわゝ!!!・・・や・め・・・・ろ・・・》

切り刻まれながら蛇の女の絶叫が少しずつ消えていくと、

螺旋の輪が徐々に回転を抑え、

シンの合図で上空の剣から一本ずつ千術箱に戻っていった・・・

大蛇の居たあとには黒い煙が立ち込めていた・

「父さん!すごい!」

ランがシンに飛びついた!

アキムも走り寄り、興奮冷めやらぬ様子で言った。

「相変わらず凄い破壊力だ・・久々に戦ったシンを見たよ！」

「ああ、だが助かった・・あのままではみんなやられていた。俺も油断していた・・ランよ、すまなかったな・・」

「そんなことない！父さんがこんなに強いなんて・・知らなかった！」

興奮が冷めないランは、さらにシンに抱きついた。

「おーい！大丈夫かー！？」

銃を腰にぶら下げた男が走って来た・・

「おお！あんたか！？さっき助けてくれたのは！？」

アキムが笑顔で男の肩を叩いて聞いた。

「ああ、うまく当たってよかった！」

それにしてもあんた強いな！それにさっきのは何だったんだい？」

シンが答えた。

「あれは恐らく魔人だ・・」

私も話に聞いていただけだったから・・油断してしまった。危ない所だった、助けてくれて感謝する！」

シンは男の肩をアキム同様に叩いた。

男は頭を掻きながら照れくさそうに返事をした。

「いやゝそんなに褒められると・・・まいったな・・・」

アキムはその男が気に入ったのか、今度は肩を抱いて言った。

「いやいや、本当に助かったよ！あんた名前・・・なんていうんだい？」

「ああつ、サルージっていいいます！」

「サルージか、いい名だ！お礼に今夜一杯どうだい！？」

サルージも気に入った感じで答えた。

「ああいいねゝ！だけど連れが・・・」

あとから来るから宿を探さないといかんで・・・」

「なら心配要らない！俺の知っている宿があるから、そこに案内するよ！」

そこに先ほどの蛇女の言葉を思い出したランが心配そうに言った・・・

「アキムさん、さつき街が・・・」

アキムの顔が一転した・・・

「そうだった・・・知り合いが心配だ。シン！急ごう！」

「そうだな！サルージさん、一緒に来てくれると心強いのだが！」

「ああ、一緒に行くよ!」

シンとレイ

オラルとスーランは日も傾いた頃、その街に着いた。

「この辺り・・・何があったのかしら？」

「ああ、誰もいないな・・・」

通りの家には人影も無く静まりかえっていた。

「サルージは何処まで行つたのかしら？
私が野宿嫌いなもの知っていると思うけど・・・」

辺りを見ながら二人が馬を進めていると
先に見える煙突から煙が上がっているのが見えた。
スーランが煙を指差した。

「ねえ、あそこに誰がいるのかしら？」

「そうだね、行ってみよう」

小走りに馬を走らせ、その家に近づくと・・・何やら笑い声が聞こえた。

聞き覚えのある声にスーランが気付いた。

「あの笑い声！サルージだわ！」

・ スーランが駆けだすのを見て、苦笑いをしながらオラルが呟いた・

「あいつ、もう飲んでいるな・・・」

その家の馬止めに着くと、

スーランはすかさず馬を降り、勝手に家に入るなり呼び捨てた。

「サルージ！」

家の中にいた全員が振り向いた。

サルージはスーランに気がつく・・・あわてて椅子から立ち上がった！

「ああ！スーランさん！今、迎えに行こうとしていた所です！」

だいぶ慌てたのか、酔った勢いもあってスーランに近づいた時・・・転んだ。

「えへへ・・・大丈夫です、ちょっと・・・つまずいただけです」

「大丈夫かい？だいぶ飲んだからな」

言いながらアキムはサルージを起こした。

「こりゃまた、べっぴんさんじゃのう」サルージのいい女かい？」

カズチがスーランを舐めるように見て言った。

「冗談じゃないよ！」

スーランはサルージに近づくと、頭を撫でながら言った。

「だいぶご機嫌だね。私達、どれだけ探したと思っているの。」

引き攣った笑顔で・・・段々と頭を撫でる手に力が入った。

「すみません！ちょっと飲んで、直ぐに迎えに行こうと思っていたんです！」

信じてください！」

サルージは、スーランを拝みながら必死に御願いをした。

「まあまあ娘さん、何があったか知りませんが・・・許してやってください。」

サルージさんは我々の命の恩人なのです」

シンが近づいて言った。

一瞬、シンを見たが・・・腹立ちが収まらないスーランはサルージを見ると

「恩人？こいつが？・・・今度は何をやらかしたんだい！！！」

言いながらスーランはサルージの首を絞めた。

「うつ、ぐぐ・・・」

そこにオラルが入って来た。

「スーラン、もういいだろ。何か事情があるらしい」

落ちる寸前のサルージを見かねて言うと、スーランが乱暴に手を離れた。

「があ！・・・はあはあ・・・だんな・・・助かった・・・」
サルージが、ホッと息をついた。

オラルがサルージを立ち上がらせると聞いた。

「サルージ、こちらの方は？」

「はい、ここに来る途中で知り合って・・・で一緒に来ました」
サルージは首を摩りながら答えた。

「私はシンと申します。」

こちらが娘のラン、仕事仲間のアキム、そしてこの家のカズチです」
シンが順に紹介をした。

「さきほど魔人と思われる女の二人組に襲われまして、
危うい所をサルージさんに救われました。」

サルージさんがいなければ、我々は今頃どうなっていたか・・・」

オラルはサルージが命の恩人と聞いて、抱えていた肩を優しく叩いた。

「そうですか、サルージがお役に立てて何よりです。
ところでこの街・・・何があつたのですか？」

「はい、恐らく先ほどの魔人達によつて皆・・・
幸いカズチは街から出ていて助かりました。
魔人は・・・私も見るのは初めてでしたので・・・」

「魔人・・・西の国と何か関係があるのでしょっか？」

二人の会話に、ほろ酔いのカズチが割って入った。

「教えてやろう！魔人の国のアルセルデームが滅んだのじゃ。

魔王を含め、力のあつた魔人達は皆ことごとくやられた。

それに乗じて下っ端の奴らが、ここぞとばかりに好き勝手を始めたのじゃよ。

アルセルデームを滅ぼしたのはどうやら魔界の者らしい。

奴ら、この世界を自分達の世界にするために動き出したようじゃ・・・」

「そんな！じゃあ私達みんな殺されちゃうの！」
ランがカズチに聞いた。

「さて、この先どうなるかはわしにもわからん・・・」

「そんな・・・」

そこに息を吹き返したサルージが言った。

「ランさん！大丈夫ですよ！こちらのスーランにかなう奴なんていませんから！」

それにシンさんの二人がいれば敵なんてありません！」

「スーランさん！でしょ！調子のいい事言って！」

スーランはサルージの耳を持ちあげた。

「いたた！ホントですっ！」

さらにカズチがランの心配を払うように声を掛けた。

「確かにシンが居れば安心じゃよ。シンは魔人よりも強いからの」

シンはスーランとサルージのやりとりに笑みを浮かべながら、背負っていた千術箱を外した。

「私ではなく、この先祖から代々受け継がれた千術箱が命を救ってくれた・・・」

過去にも恐らく・・・今回と同じような事があったのだと私は思う・・・今の平和があるのは、先人達が勝ち取ったものかも知れません・・・」

カズチが言った。

「確かにそうかも知れんな。・・・それで、これから皆はどうするのじゃ？」

シンが言った。

「これから私はランを連れて家に戻ります。レイが心配ですので・・・」

「

「そうか、じゃが夜が明けてからにした方が良いのではないかの？他にも、うるついている奴が居るかも知れんし・・・」

「確かに・・・でも・・・やはりレイが心配です・・・それなら私だけ戻ります。」

カズチ、ランを今夜預かってもらえませんか？

明日、レイを連れて戻って来ますので」

「まあ、シンなら夜通し走れば着くじやろうが・・・ランを連れて戻って来るとなるとな・・・」

「ここも無事とは限らんし・・・」

オラルが・・・シンに近づいて声を掛けた。

「シンさん、私の馬を使つて下さい。」

明け方までにはレイさんを連れて戻って来られるはずです」

「えっ？良いのですか？」

「はい、急ぐ旅でもありませんから。

それに今日はこの辺りで宿を取ります。

ランさんも皆と一緒になら心配無いでしょう？」

「ありがたい！感謝します！」

一刻も早くレイのもとに駆けつけたかったシンは、その申し出に遠慮はしなかった。

カズチが言った。

「皆、今日はこの家に泊るといい。

シンよ、心配しないで行って来い！あとは任せておけ！」

シンは夜の森を、月明かりを頼りに駆けていた・・

（やはり馬の方が何倍も早いが・・・

この馬は、まるで私の家を知っているかのように躊躇せずに駆けていく・・

オラルさん・・何者かは知らないが良い馬を持っている・・）

感じていたよりも早くにアキムの家の手を過ぎた。

（あの峠を越えればすぐだ！）

シンは・・家との距離が近づいてくると、急にレイの事が心配になつてきた。

（レイ！無事でいてくれ！）

近道である、峠の獣道を降りていくと・・・

家の辺りに火が上がっているのが見えた。

「レイ！」

シンは思わず叫んだ！馬もそれに反応して速度を上げた・・

家の近くに来ると、火は家から離れた所で数か所、燃えていた。
家の前に駈け寄ると叫んだ。

「レイ！どこにいる！」

シンは馬から飛び降りると、家の戸を開けた。

「レイ！・・・」

中を見渡したが家には誰も居なかった・・

ただ、暖炉に火が燦ぶっているのを見ると、ついさっきまでいたらしい。

シンは家の回りを探した。

「レイ！どこだー！」

シンの声は山に響いたが・・・返事はなかった・・・

シンは必死にレイの行きそうな所を全て探したが・・・どこにもいなかった。

気がつくつと、うつすらと日が昇ってきていた。

（何処にいったのだ・・・レイ・・・）

重い足取りで家に戻ると、明かりの射した家の中に入った。

家の中は、特に荒れている様子もなかった・
が、夜の暗闇で見えなかった・

普段は使うことの無い、シンがレイの為に作った剣が無くなっていた。

（何があつたのだ・・・）

剣の置いてあつた場所を見ていた時、「シン・・・」入り口からささやく声がした。

シンは一瞬背筋が、ぞっ！とした・・・全く気配を感じなかった。

恐る恐る振り向くと・・・普段と変わらないレイがいた・・・

「レイ！大丈夫か、何があつた？」

レイが歩み寄ってくると・・・シンは無意識のうちに警戒しながらレイに近づいた・・・

「シン・・・」

レイの目を見たシンは、いつものレイを見ると優しく抱きよせた・
レイの温もりを感じ、安心したシンはレイを見て言った。

「心配したぞ・・・何があつたのだ・・・」

「・・・ええ・・・昨日、畑から戻ってきて・・・食事の準備をしていたら・・・」

山の向こうのお婆ちゃんが訪ねて来て・・・シンは居ますか？って・・・私がシンは街に行きました、と答えると・・・急に態度が変わって・・・なら都合がいい・・・って」

「お婆ちゃん？トマ婆さんの事か？」

「ええ・・・」

「・・・確か・トマ婆さんは口クに歩くことも出来ないはずだが・・・」

「・・・そう、不思議に思ってた見たら・・・」

そうしたら鉈を持ちだして・・・咄嗟に私も剣を持って・・・

そしたら《冗談じゃよ》って・・・そう言っただけ帰っていったの。外に出たら誰も居なくて・・・それで私、怖くなって・・・

あなたを追って街の方に行ったわ・・・

だけどランが戻って来たらと思って、火を熾して遠くから見ていたの・・・」

「そうだったのか、無事で良かった。

ランも無事だよ、街で待っている皆の所へ行こう」

「そう、良かった。街には人がいるの？」

「ああ、仲間以外にも、まだ居ると思う」

「そう！では早く行きましょう！」

急に元気になったレイを、その時は変に思わなかった・・・

シンとレイを乗せた馬は、昼過ぎ辺りに街に着いた。
外で帰りを待っていたランが気付いた。

「あつ！帰って来た！父さ〜ん！」

ランが全身で手を振ると、シンも手を振って返した。
ランが走っていった。

「母さん！ごめんね心配かけて・・・」

レイが馬から降りるとランを抱き寄せた。
遠巻きに見ていたオラル達は、その光景に微笑んだ・・・

「あれがレイさんかい？こりやまた別嬪さんじゃのう〜」

カズチが手を翳し、覗きこむようにして言った。

「相変わらずスケベなジジイだよ」

スーランが言うのと、横からサルージがシン達に走っていった。

「シンさん、疲れたでしょう」

そういうと馬の手綱を持った。

「ああ、すまない」

シンがオラルに寄って言った。

「オラルさん、ありがとう・・・助かりました」

「いえ、レイさんが無事で良かったですよ」

「皆さんに心配かけました」

シンはレイの肩を寄せて言った。

「私の妻のレイです」

「・・・レイです」

軽く会釈をして答えた。

「近くで見るとますます綺麗じゃの〜」

「ジジイ！」

「ランちゃんも、レイに似て美人になること間違い無しだ！」
アキムが言つと一同を笑いが包んだ・・・

オラルがシンに言った。

「シンさん、晩まで少し休んでいて下さい。
我々も、もう少しこの街で情報を得てから発つことにしました。
今夜はゆっくり皆で飲みましょう」

「そうですか、ならあとで食糧を取って来ます」

「シンさん！いいって！俺たちに任せてゆっくりしてくれよ！
酒も飯も十分に用意出来るからよ！」
サルージがアキムの肩を抱きながら言った。

「あんた達は飲めれば、それでいいのしょうが！まったく！
スーランが腕組みをしながら言い放った。

「あの、私も行っていいですか・・・」
ランがオラルに聞いた。

「そうだね、シンさんさえ良ければ・・・」

「オラルさん達と一緒になら安心です。ラン、迷惑掛けるなよ」

「はい！」

「では一応、サルージの馬を置いていきます。
スーランとランちゃんは俺の馬に乗るといい」

二人が馬に乗ったのを見たサルージが言った。

「こりゃあいい、なんか美人の姉妹みたいだよ」

「そうかい？かわいい妹に手を出すんじゃないよ！」

「そりゃあもう！わしもまだ死にたくないですから、さあ行きますよ」

サルージが手綱を持って歩き出した。

「それでは夕暮れまでには戻ります。」

オラルが言っているとシン達を残して四人は街に出て行った。

街の中心付近は誰も居なかった。

「この辺りも昨日の奴らにやられている・・・」オラルが言った。

「この辺りを少し調べてみよう。」

サルージ、この先に人がいるか見てきてくれ。

スーランは、ランちゃんここに居て様子を見ていてくれ。

俺はあの丘の辺りを見てくる。何かあったらいつものように知らせてくれ」

「任してくれ！ついでに酒でも買ってくるよ！」

サルージは腰の銃を叩くと走って行った。

「サルージ・・・なにか嬉しそうだよ、何かあったのかね？」

スーランが言うと「ああ、そんな感じだ。最近妙に自信つけたのかも・・・」

オラルが笑って答えた。

「そうだ、ランちゃん・・・これを使うといい・・・」

そういうとオラルは、馬に括りつけてある一本の刀を取り出した。

「何も無いよりは、ましだから」

ランは馬から降りて、その刀を受け取った。

「これ・・・こんなに立派なもの・・・オラルさんではないのですか？」

馬上からスーランが優しい口調でランに声を掛けた。

「ランちゃん、オラルはね・あんたが気に入ったんだ。
だから遠慮することないよ！それにオラルは、刀は使わないから」

「そうですか・・・でも・・・」

「抜いて」らん

「はい」

ランはそっと刀を抜いた。

「これ・・・」

その刀は、シンが作る物とは違い、漆黒の輝きを放っていた・

「この刀は、使う人の技量によって強くもなれば、弱くもなる。ランちゃんにピッタリの刀だと思うな！」

ランは嬉しそうに鞘に納めた。

「ありがとうございます。大事に使います！」

スーランが馬から降りて「こうやって付けるんだよ・・・」
といいながらランの背中に刀を結び付けた。

「いいじゃないかい！似合っているよ！」

「ああ！ピッタリだ！」ランはちよつと照れくさそうだった。

「慣れるまではスーラン姉さんに教わるといいよ！」

冗談交じりにオラルがいうと、
スーランは満更でもない様子で「そう言われると何だか妹に見えてきたね〜」

と笑みを浮かべて言った。

「それじゃあ、行つて来る」

軽く手を振ってオラルは丘に向かって行つた・・・

「あの・・・スーランさん？オラルさんて、どうゆう人なのですか？」

「・・・そうだね・・・正直な話、私もよく知らないんだよ。」

・ただ、何か安心していられるんだよね・
前に私も助けられてさ、それからあの人を探して追いかけて・
で、いま一緒にいるって所かな？」

「そうですか・・・」

「まっ、そのうちわかるでしょう！・・・さてと、この辺り見てみようか！」

「はい！」

「ただいま」

「待たせたな！酒とイノシシ持ってきた！」

オラル達は日暮れ前にカズチの家に戻ってきた。

「どうだった？」

アキムがサルージに聞いた。

「まったく、何処も彼処も誰もいやしない。
まあ、街外れに、何人かはいたけど・・・皆逃げ出す支度をしていたよ」

「そうか。たいして人の多い街じゃあ無いから・・・何とか逃げ延びてくれればなあ」

シンがランの刀に気付いた。

「ラン？それは？」

「オラルさんが使ってくれって」

オラルがシンに言った。

「ランちゃんに使ってもらうのがいいと思って、大した物ではないので気にしないで下さい」

「そうですか、何から何まで・・・恩に着ます」

それから皆の話では、期待した情報などの収穫もなかった・・・

日も暮れた頃、食事を始めた。

「だんな、これからどうします？」サルージが聞いた。

「そうだな・・・ここでは情報が入らないから・・・

カズチさん、ここから何処へ行けば情報など入りますか？」

「そうじゃの？・・・イタール川を渡ってヨマダイの国か・・・南のハルデイス国か・・・ハルデイスはアルセルデームの隣の国じゃから危険じゃ。

ヨマダイへ皆、逃げ出しておると思われるから、そちらの方がいいじゃろう」

「そうですか、ではそのヨマダイへ行ってみます。シンさん達はどうしますか？」

「そうですね、この辺りも安全では無い以上、留まることは出来ませんし・・・」

スーランがオラルに聞いた。

「ねえ、ルードシアのマリーさんの所なら安心なんじゃない？」

するとサルージがぼん！と、手を叩いて言った。

「そうだ！あそこなら不自由しないさ！なんせ守護神様もいるらしいからさっ」

「・・・ルードシアですか、確か大きな湖に囲まれていて・・・
独立している国だとは聞いたことはありますが・・・」

少し先の見通しが見えて顔の和らいだシンにスーランが言った。

「でもサルージみたいのがいっぱい居るから気を付けてよ！ランちゃん
は特に！」

「勘弁してくださいよ！まるで変人扱いじゃないですか！
俺ぐらい良い男はなかなかいませんよ！」

「アハハハ、サルージはいいやつだよ！まあ、好き嫌いはあるだろうけど？」

そこでカズチが言った。

「ルードシアか・・・隣の国じゃが、この歳まで行った事がないの！
アキムよ、どうする？」

「ここも安心出来ないから・・・シンが行くのなら俺も一緒に行くよ」

「そうじゃのう・・・一度ここを離れた方が良いかも知れんな。

その、オラルさんの知り合いのマリーさんのところへ暫く身を寄せて
もらうかの・・・」

するとサルージが
「そうと決まれば今夜はペアー！と、やろっ！」と、コップを持ち
あげて言った。

マド様・現る

深夜、皆が寝静まった頃に・・・アキムが用を足しに外に出た・

・

外は満月の月明かりに照らされていた・・・

「はあ、きれいなお月様だ、よつと！」

ブルブルと体を震わせ、まだ酔いも冷めやらぬなかを、鼻歌交じりに用を足し終えて振り向いた時だった・

「わっ！？・・・レイ・・・さん？」

「・・・ええ、驚かしたみたい？・・・なにかしら・・・
目が冴えちゃって・・・見て、綺麗な月・・・」

酒で火照っているのか・・・月明かりなのかは分からなかったが・・・
月を見上げたレイは妙な色気を出していた・・・

胸のふくらみが少し覗き・・・

スラリと伸びた足が月明かりで・・・その輪郭をとらえていた・・・
アキムは変にドキドキしながら見惚れた・・・

「アキム、ねえ・・・少し歩かない？」

「えっ？ああ・・・いいですよ」

アキムには断る理由が無かった・

シンとは幼馴染とはいえ、アキムも幼少の頃からレイに好意を持っていた・・・

歩くレイの後ろを付いていきながら・・・

その色気のある腰付きに見入ってしまった・・・
家から少し離れた所でレイが聞いて来た。

「街に・・・人は居なかったのですたっけ？」

「ええ・・・昨日の二人組みの女に食われたのではないかと・・・
何かおかしいことになってきていますね・・・」

「その女を・・・倒したのでしょうか？」

「ええ、サルージとシンが。そりゃあ見事なものでしたよ！
レイにも見せてやりたかった！」

酔いの勢いもあつてか、アキムは得意げに答えた。

「そう・・・では今・・・襲われたら・・・アキムは私を守ってくれる
？」

じつ・・・と、見つめてくるレイに、アキムは、ドンッと胸を叩いた。

「えっ！あつ！・・・もちろん！任せてください」

「よかった・・・」

そういうと・・・レイはゆっくりとアキムに近づいて抱きしめた・

「なっ!・・・レイ!・・・」

アキムは、金縛りに遭ったようにそれを拒否できなかった・

アキムの胸にレイの胸のふくらみがゆっくりあたるのを感じ、
アキムは・・・それに逆らえずにレイの背に手を回し・・・抱き寄せ
た・

肌の温もりを・・・お互いが感じるとレイがささやいた。

「・・・ちよつと、お腹空いてきちゃった」

「えっ?」

すると、抱いている手の感覚が硬くなるモノを感じた・
アキムはレイの腕以外にも、全身を抑えられるのを感じ、酔いが一
気に冷めた!

「なっ!」

危険を感じ、咄嗟に助けを呼ぼうとしたが・・・胸を圧迫されていて
声が出せなかった。

「二人のお返しをさせてもらっよ・・・」

レイの声が、低く擦れた声に変わった・

「がっ!・・・なっ!」

レイの顔はそのままに・・・

身に着けていた衣服は裂け、背中には羽根が生え・・・腕は鎌の形に変わっていた・・・

さらにレイの口が・・・横に大きく開くと、鋭利な歯を持ったカマキリに姿を変えた・・・

シャー！ つと、声を発すると・・・

アキムを丸飲みしようとして頭上で大きく口を開けた・・・

《 まで！！ 》

静かに歩み寄って来たオラルに気がつく・・・口を縮めていった・・・

「・・・なんだ！？・・・そこで待っている、次はお前だ」

「・・・その前に聞きたい事がある。

お前たちはアルセルディムの魔人達とは少し違う、何処から来た？」

「魔人だと？そんな下等なモノと一緒にするのではない！

我々は、ジェラ様より生を受けた妖魔人！

そしてジェラ様の命により、この世界を我々、妖魔人のものとする！」

外の物音に気付いたシンが走ってきた。

アキムを鎌で抑え付けている大きなカマキリを見上げた・・・

「・・・オラルさん・・・これは！」

「ああ・・・どうやらレイさんに撮り付いていたらしい・・・」

「なっ！・・・これがレイだって！？・・・そんな・・・」

確かにレイだと気付いたのは・・・アキムを抑え付けている辺りがまだ女の姿を残し、

さらに完全に顔は変化しておらず・・・かすかにレイの面影を残していた。

「なんだ？・・・一人づつ食ってやろうと思ったのに・・・まあいい、まとめて食ってくれるわ！」

カマキリになったレイが再びアキムを丸飲みにしようとした時、
《バシッバシッ！》っと、大きく開けた口に、幾つかの石飛礫が当たった！

「があ！」

不意打ちを食らい、一瞬怯んだ。

「やめて！母さん！」

ランが駆け寄ってくると、異変に気付いたサルージとカズチも続いた。

「・・・なんてこった！」

カマキリの中のレイが、少し正気を取り戻していた・・・

「・・・んがあ・・・！？・・・ラン？・・・があ・・・いま・・・待って・・・いて・・・」

「レイ！今助ける！待っている！」

シンが飛び出そうとした時、サルージが抑えた。

「まった、シンさん！攻撃するとレイさんも死んじまうよ！」

確かに手を出せば・・・レイにも危害を加える事になってしまう。

それはシンも良く分かっていた。が、気持ちを抑えられなかった・・・

「レイー！」

再びカマキリが正気を取り戻すと、一同を見渡していった・・・

「・・・揃いも揃って！これでもくらいな！」

そういうとカマキリは羽を広げ、間髪入れずに突風を送り出した！それを二度、三度と受けた一帯は・・・木もろ共なぎ倒されて、吹き飛んだ。

ランは咄嗟に、飛ばされる木から木へ飛び移って逃れた。

シンとサルージは地に剣を突き立て、なんとか凌いだ。

カズチは、家の辺りまで飛ばされ・・・転がっていた・・・

「くそっ！これじゃあ近づけない・・・」

シンが突き刺していた剣を抜くと、構えをとった。

「母さん・・・どうしたら・・・」

ランがシンに寄り添って言った。

「近づいても手を出せない！・・・」

シンがランを抱き寄せて、悔しさをにじませた・・・

「お前達が最初から勝てる望みなんて無かったのさ！
この体を手に入れた時からねえ！」

すると、カマキリの後ろにいたスーランが、声高々に言い放った！

「そうでもないさ！私達を誰だと思っているんだい！」

「なに！」

カマキリが振り向くと・・・自信たっぷりに構えたスーランを見た。

スーランは、ランに手でこっちに来るように合図をした。

「ラーン！あんたの出番だよ！」

「えっ？・・・わたし？」

何の事か・・・訳も分からずにスーランを見た。
するとスーランは、カマキリの羽に飛びついた！
その瞬間！カマキリの全身を、雷が走った！

「ぐわあ！・・・があ！・・・ああ・・・」

カマキリは・・・全身が痺れ、掴んでいたアキムを離し、少しの間、身動きが取れなくなつた・・・

「スーラン、アキムまで痺れているぞ？かわいいそうに」

「そうかい？だいぶ抑えたつもりだけど？」

オラルが何処からともなく現れた・・・

「さてと・・・」

オラルが飛びあがると、痺れて動けないカマキリの頭を鷲掴みにした・・・

「んあ！」

痺れて抵抗出来ないカマキリに言った。

「あんまり悪さするんじゃないよ・・・スーランが喜ぶだろう？」

オラルが含み笑いを浮かべ、両手に力を込めると・・・黒い煙が立ち込めてきた。

「があああ！・・・や・・・め・・・ろ！・・・」

オラルがカマキリの口元から、人のような黒い気体を引きだした。するとカマキリは・・・見る見るうちにレイの姿に戻っていった・・・

「レイ！」

「母さん！」

シンとランが駆け寄り、徐々に裸体になっていくレイに、シンは自分のマントを掛けた・・

「シンさん、大丈夫ですよ。少ししたら氣を取り戻します」

オラルが声を掛けると、シンは涙を浮かべて微笑んだ・・

「さあ！ランちゃん！こいつを切ってくれ」

採り付く人がいなくなった黒い気体は、オラルの手の上で風船のような気体に包まれ、その中で必死に逃げようとあがいていた・・

「があ！・・助けてくれ！・・なんでも言う事聞くから！・・たのむ！」

その中から逃げる事が出来ないと確信したシン達は、オラルの回りに集まった・・

「そうか、じゃあ一つ聞く。ジェラ様とは何者だ？そいつは何処にいる？」

「ああ・・でも本当に逃がしてくれるのだろうか！・・約束しろ！」

「・・いいだろう、わかった。俺は逃がしてやる！」

「えっ？逃がすのですか！？」

ランが、なぜ？という顔で聞くと・・・すかさずスーランが言った。

「まあ、見ていなよ！」

とりあえず逃げるのを止めた黒い気体は、オラルを疑いながらも話し始めた・・・

「・・・ジェラ様は・・・ザルギスに居られる・・・ただ一人の人間・・・そして・・・大魔術師だ！」

魔人と共に、この世界を奪い・・・

そして、そのあと魔人共を殲滅するために・・・ひそかに我々が生み出された。

だが、魔人に匹敵するほどの戦力は・・・今は無い・・・

だから人間に採り付いて戦力を増やす。

食べた人間は・・・ジェラ様が妖魔人として新たに命を吹き込む・・・どうだ？

すばらしいだろう！

いずれこの世界は妖魔人のものとなる！」

今度は自慢げに風船の気体の中をぐるぐると回り始めた・・・

「大魔術師のジェラ・・・？誰か知っているかい？」

オラルが皆に聞いた。

「・・・？さあ？」

「聞いたことない・・・」

「ジェラート？なら・・・」

「ジュレじゃないのかい？」

「・・・」

間が空いた・・・

「おい！誰も知らないぞ！」

最後にオラルが黒い気体につっ込んだ。

「なに！知らないだと？・・・確かに・・・海の方の・・・
其のまた大陸の方の・・・」

声が徐々に小さくなると、スーランが黒い気体に近づき、
バチバチと雷を発する両手で言った。

「嘘つきは・・・死刑だ・・・」

その仕草が楽しそうに見えたのはオラルだけでは無かった。

「ちょっと！本当ですって！やめて！約束したでしょ！

この！うそつき！・・・うんこたれ！・・・ばか！・・・あつ、いえ・・・う
そです・・・

ねえ！ゆるして！おねがい！」

「・・・元々の人格は・・・オカマ？」

スーランが覗き込むように見ると・・

口が《へ》の字になって両手で胸を抑える仕草をしていた。
何だかその仕草、愛嬌に少し同情した・・

オラルが気体を撫でて言った。

「まっ、今度生まれ変わったら・・

もつとマシな人生を送れよ！さあ、ランちゃん！切れ！」

「えー！やめて！おねがいー！まだ死にたくないーああ・・

やめろ！この野郎！食っちまうぞ！この！・・

出せ！ったら！出せ！・・ちよつと聞いているの！」

ランはどうしたらいいか分からなかった。

「あの、私じゃなくて・・父さん、お願い・・」

「・・ラン、あいつを逃がしたら、次に採り付かれた人を切らなくてはならない。

それがもし父さんなら・・ランは切れるか？」

「えっ、でも・・」

「ひと時の感情に流されるようだったら二度と剣は持つな。
生と死・・この二つは共存出来ないのだ！」

「・・わかった」

まだ決心のつかないランにオラルが言った。

「ランちゃん、俺はこいつを逃がすと約束した。だからこいつをランちゃんに向けて投げる！」

こいつが逃げる前に、どうするかはランちゃん自身が決めてくれ！」

そういうとオラルは、もう一方の手をかざした・・

すると気体が真っ白になり、中は見えなくなった。

「ああ、たすけて！もう！なんでもしますから！」

「それはランちゃんに聞いてくれ！いくぞー！」

そういうとオラルはランに向けて、真っ白な気体を投げた！

「えっ！あっ！」

近づく気体に・・ランは思わず目をつぶり、迷いながらも刀を振り切った！

《ボフッ！》

真っ二つに切れた気体は・・・ランの後ろに流れた・・・

何となく手ごたえを感じたランは、

恐る恐る振り返ると・・・

黒と白の入り混じった気体から、少しずつ黒い気体だけが蒸発していった。

残った白い気体が手のひらほどの大きさになって・・その場に漂っていた・・・

すると・・

「んはあゝ！・・・あれ？わたし・・・何していたのかしら？・・・

ここは誰？私はどこ？・・・あなた！かわいいわねゝ

でも化粧のノリがよろしくなくてよ！・・・??

やだ！みんな！ジロジロみて！・・・食べちゃうぞ！・・・あは！・・・

」

その小さな気体は・・・小さな羽を一生懸命に動かし、

綿のような体に・・・マシユマロのような手足に、化粧をしたオカマ？の顔をしていた。

フワフワと飛ぶと・・・ランの肩に乗って来た。

「お譲ちゃん、お歳いくつ？お化粧の仕方、教えてあげてもいいことよゝ」

新しいおもちゃ？を見つけたスーランが走ってくると、その生き物を親指と人差し指で掴んで持ち上げた・・・

「なゝにゝこの生き物？」

「ちょっと！いたっ！もう変態！わたしデリケートなの！だれ、あんた！・・・

んっ？・・・オバン！」

「誰がオバンよ！握りつぶすわよ！」

「えっ！うそですよゝ！だけでもう少し・・・前髪上げた方がいいわねゝ！」

「・・・かわいい・・・」

「・・・えっ？ランちゃん？これが？」

「はい！かわいくないですか？」

ランが両手でスーランから受け取ると・・・オラルが近づいてきて言った。

「アハハ、そいつはランちゃんが気に入ったみたいだよ！」

「はい！・・・でもこれ、なんですか？」

「んゝたぶん・・・その・・・ジェラとかいうのが、人から抜き取った魂？って・・・ところかな？」

ランちゃんがその刀で切るときの心の迷いが・・・そいつを成仏させなかったのかも・・・」

「えっ、じゃあ私のせいで・・・」

「まあ、害は無いから・・・ランちゃんが面倒みてやってよ」

「・・・はい！分かりました！よろしくね！・・・えっと...名前・・・」

「お・か・ま・！で、いいんじゃない！」

スーランが冷やかし気味に言った。

「だめです！ちゃんと名前つけてあげないと・・・」

「おゝおゝ、急に強く出たね」

「だって・・・」

スーランに押され気味のランをかばうように、そいつがスーランに言った。

「なに！ちょっと！あ・ん・た！私にだってちゃんと名前ぐらいあるのよ！

今日からマド様！と、お呼び！」

「マド？へんな名前！」

「なによ！オバン！やる気！」

「おゝおゝ、やってやろうじゃないか！？」

「・・・ラン！やっておしまい！」

「・・・わたし？」

「そうよ！ご主人様の言う事がきけなくて！？」

ランの肩の回りをフワフワと飛びながら、短い拳を振りまわしていた・・・

その姿にオラル達は笑いを抑えられなかった。

「ラン、しっかり面倒をみてやるんだぞ・・・」

そう言うシンの眼差しは、とても優しくかった。

「それにしてもサルージよ・・・あんた達は何者なんだい？」

アキムが聞いた。

「何者つていわれても・・・旦那に聞いてみてくれ、俺も良く知らないんだ」

「そうだな、ぜひ私も聞きたい。」

シンがオラルにたずねた。

「・・・旅の目的は人探し。

で、そいつら集めてこの世界を・・・平和・・・にする事かな・・・ありきたり、だけど」

「いや、サルージさん、そしてスーランさんを見ていると信じられる気がします。

なによりオラルさんには・・・なにか不思議な力を感じます」

「そんなことはないですよ、たいして一人では何も出来ませんし・・・」

「いゝや！あんたにはとてつもない何かを感じる！わしの目に狂いはない！」

先ほど家の辺りまで飛ばされたカズチが、杖をついてやって来た・・・

「カズチ！大丈夫かい？」

アキムが寄っていくと手を貸した・・

「ああ、大丈夫、オラルさん、あんた達・・なにか・・
とてつもないことをやろうと・・考えてないか？
・・・世界の平和・・あれは本心なのでは、ないのかい？」

「さあ、正直なところ、私にもわかりません・・
ただ、時が来た・・と感じています」

「・・たしかに何か動き出しているようじゃ・・」

そこにフワフワとマドがきた。

「ちょっと！いつまで食っちゃ辺っているの！
お腹が空いたわ！行くわよ、ラン！」

みんな呆氣にとられたが、そのうち笑いが込み上げてくると一斉に
笑いだした。

「なに！ちょっと？・・何がおかしいの！・・・ラン！やっておし
まい！」

山肌から朝日が昇るのを笑いが迎えていた・・・・

バトルシップ 武蔵！

次の日の早朝、オラル達とシンの家族は・・・
それぞれ別の道に進むことにしていた。

「では、シンさん達も気を付けて。
それから、マリーさんによろしくと、伝えてください」

「はい、色々とお世話になりました。ランの事、よろしく願います。」

・・・ラン、オラルさん達と一緒にだからって、修行を疎かにするんじゃないぞ」

「はい・・・今度父さんに会うときは・・・私の方が強くなっているわ！」

「それは頼もしい・・・十分に気を付けてな！」

「はい！・・・母さんも元気で・・・」

「ラン・・・困ったら、いつでも会いに来てね」

「・・・うん」

「・・・ちよつと???」

私の事、忘れてない？

私がいれば鬼のキンタマでしょ！

私を誰だと思っているの！！

まった・・・くう！？・・・んっ！・・・んん！・・・」

スーランがマドの口を塞いだ・・・

「あんたは空気読めないの？・・・いま、いいところなんだから！邪魔しないの！」

「マド・・・ランを頼んだぞ」

シンが、スーランからマドを受け取ると・・・優しい口調で話した・・・

「・・・おっ？・・・おう・・・任せなさい！」

ブサイクな大人達からしっかり守ってあげる！

特にこのサルージ！？

だいたい髭の生やし方に、センスの欠片も感じられないわ？
・・・まっ！そのうち、わた・・・し・・・がっ！・・・んっ！？・・・んん！・・・」

今度はスーランが首を掴んだ・・・

「まったく、調子に乗って！・・・」

さあ、ランちゃん後ろに乗って。いきましよう！」

別れの方が和んだ所で、オラルがシン達に言った。

「そうだね、行こうか・・・では皆さん、お元気で！」

「はい、お元気で・・・それではまた・・・」

互いに別々の道を進み始め、街道の曲がる手前で、ランは大きく手

を振った。

少しずつ遠ざかるシン達も手を振っていた・

「ラン、一緒に行かなくて良かったのかい？」

《ランちゃん》とは呼ばずに、

スーランが気を使って声をかけると・ランが言った。

「別れるのは寂しいけど・でもこの世界の事、もっと知りたいし・

・
オラルさんから頂いたこの刀を・一人前に扱えるようになりたいから・」

「あれ？それ??」

私がいるから寂しくないんじゃないって??どうゆうこと?」

マドが、フワフワとランの回りを回りながらいると、

スーランがランに・

「ラン、もう一度切ってみなよ・今度は大人になるかもよ?」
そういうと・

「ちよっと！バカ言っているんじゃないわよ！

ハゲてんじゃない！

ラン！やっておしまい！」

ランの影に隠れるように、拳を突き上げてマドが返した。

それをランが優しく掴むと・顔を近づけた・

「・・・マドがいるから私、寂しくないわ・・・」

ランに見つめられたマドは・・・ドキドキして言葉に詰まった。

「そつ・・・そ・・・そうでしょ！・・・わっ！・・・わたし・・・が！
・・・いれば・・・ちよつと！そこの！・・・変態！・・・聞いたでしょ
！」

フワフワ飛ぶと・・・ランの頭の上で中指立ててスーランにいった。

「はいはい・・・カマのくせに、ナニ照れてんだか？」

「ランちゃんにとっては、頼もしい相棒が出来たわけだ！」

サルージがマドを見ると・・・

「ちよつと・・・そこ・・・相棒？ですつて？」

ご主人様は、あ・た・し・！勘違いしないでちょうだい！」

マドは、サルージに指を指して注意した。

「アハハハ、さすがのサルージも太刀打ちできないか？

ところでマド？

なにか出来るのか？」

オラルが訊ねた。

「・・・何が出来るかですつて？・・・失礼しちゃう！」

私に出来ない事なんて・・・あんまり・・・ない？・・・かな？

・・・いや・・・あつたりして！？」

・・・やっぱり謙虚でないと、いけないと思うのよね！・・・人として？
・・・それぞれ得意な事があっていいと思うの・・・・・・違つ？」

横目でチラリと見ながら話すと・・・

「ああ、分かったよ・・・」

オラルは含み笑いで返した・・・

「ちょっと！なに！残念な顔して！

出来ない事なんて無いわよ！・・・失礼しちゃう！！」

そこへ、小走りに高台に駆けて行ったサルージが、
眼下に見える・・・大きな川を指した。

「旦那！見えてきましたよ！あれがイタール川ですよ！」

「いやゝ話に聞いていたよりも・・・随分大きくないかい？」

スーランが手を翳して言った・・・

「ああ、この大きさじゃ、橋は無さそうだね。

川沿いに沿って、船を探すしか無いな・・・..
とりあえず川まで行ってみよう」

川沿いまで来たオラル達一行は、道行く人に訊ねた。

「この川を渡るには、何処へ行けば良いですか？」

すると商売人風の三人組みの中の一人が・・・不思議な顔で答えた。

「この川は誰も渡らないよ？あんだ達、知らないのかい？」

「えっ？あつ、はい・・・でも、どうしてですか？」

「・・・以前は、船で渡れたのだが・・・寒気の時期が過ぎてから・
出る船がみんな帰って来なくなったのさ。

何か・・・得体の知れないモノが沖に居るって噂だよ・・・
だからみんな河口付近の、川幅が狭くなっている所の渡り橋まで行くのさ」

「そうだったのですか。では、みなさんもそこへ？」

「ああ、そうだ。まあ、三日ほどかかるがね・・・」

お礼を言うと三人は、気を付けて、というと、歩いていった。

「だんな、どうします？」

「やはり・・・その橋まで行かないと駄目かな・・・」

「でもさ、近くに船でもあれば渡れるでしょ？
川に居る奴を退治すればいいんじゃない？」

「・・・そのの！あたし泳げないの！橋まで行くに決まってるでしょ！」

スーランにマドが突っかった。

「へえゝあんだ水が苦手なんだ・・・ってゆうか、飛べるやつが気

にするか？

・・・そうだ！あんたちよつと行つて船を探してきなよ！」

「はいつ？そんな手には乗らないわ、

そういうのはオバンが行けばいいんじゃない？」

スーランが、こめかみをピクピクさせるのを見たランが言った。

「オラルさん、私とマドで・・・ちよつと先に行つて見てきます・・・

」

「ちよつとラン！なにを言っているの？船なんかで渡つたら危ないでしょう！」

マドがランの髪を少し引つ張りながら抵抗した。

「そうか・・・なら、この馬で行くといい」

オラルが馬を降りるとランに手綱を渡した。

「いいのですか？」

「ああ、マドには・・・今夜の宿を探してもらえると、助かるのだが？」

「はうしょうがない、やっぱり私が居ないと駄目ね。いいわよ、いいところ探しといてあげる。そのかわり高くつくわよ！」

ニヤリ、と・・・マドの扱いを分かってきたオラルは、脇のポケットから短い帯を出した。

「ランちゃん、これを着けて・・・それからこの小さい方はマドに・・・」

「これは？」

「これは、この馬の尻尾で作った帯だよ。
身に着けておけば離れていても、こいつが探し出してくれる」

ポンポンツと、馬を叩いた・・・

「そうなのですか、お利口なのですね」

「ちよつと！尻尾つて！ウンチとか付いているんじゃない？
あんたそういう癖があるの！
ラン！騙されちゃだめよ！！
・・・ちよつと！・・・ラン！・・・やめっ！・・・あつ、こら・・・」

「アハハハ、似合っているよ！」

強引にマドの首に巻き付けたランに、スーランが嬉しそうに笑っていた。

クンクンと匂いを嗅ぐマドに・・・

お揃いでいいじゃない？と、ランの帯とマドの帯を見た。

「じゃ、見つけたら戻って来ます！」

「ああ、ゆっくり追うから・・・気をつけて」

そういうと、ランとマドは駆けて行った・・・

「さて・・・サルージ??ランちゃんが心配なんじゃないの?」

「えっ?・・・ああっ!・・・わかりました・・・」

また、見つからないように見ておけばいいのでしょうか?・・・行きま
すよ・・・」

「さすがはサルージ!しっかり頼むよ!」

スーランが馬を渡すと、

サルージは・・・

「・・・はい、しっかりと仕事をしてきます・・・」
と、いいながら渋々駆けて行った・・・

「あいつも、だいぶ分かってきたんじゃないかい?」

スーランがオラルに聞くと・・・

「ああ、でもまだまだ銃を扱えていない。
今のままでは【奴ら】に太刀打ちできない」

「そうだね・・・で?ランはどうなの?」

「ランちゃんは優しい子だから・・・」

あの優しさが強さに変われば、刀の持っている力を発揮出来ると思
うよ。

俺が言うのも何だが、あの刀はとんでもないから・・・」

「へーその刀の本気を見てみたいね」

「そのうち、見られるかも知れないよ？」

サルージにも、なるべく早く使いこなしてもらいたいよ・・・
さて、どっちが先に使いこなせるか・・・」

スーランは、改まってオラルに聞いた・・・

「・・・わたしはどう？ちゃんと使いこなしている？」

「ああ、でもそれ以上は使い手次第だよ・・・なんなら・・・相手を
しようか？」

スーランの目をじっと、見ていうと・・・

「ちよつと！？ドキドキするから・・・やめておく」

それなりに恥らいながらも、胸に手を当ててスーランは照れ笑いを
した・・・

「冗談！だよ」

「ちよつと」！

その頃、ランは川岸を気持ち良く走っていた・・・

「ラン？本気で船なんて探してない？適当に休憩すればいいんじゃない
なくて？」

「駄目！マドは飛べるからいいけど・・・私達は船で渡るしかないの。
マドが大きい船になって、私達を連れて行ってくれるならいいけど
？」

「ん？そうね、ランだけならいいけど？他は嫌ね！だって臭いから？・・・」

あれっ！？つとマドを見た・・・

「・・・えっ？・・・マド！本当なの！？」

「ちょっと！あたし、あんたのご主人様でしょ！
あたしに出来ない事なんてないの！・・・でも皆には内緒よ！」

「そうなんだ！すごいね！」

「ちょっと！内緒だって言っているでしょ！」

「分かった！内緒にする・・・で、他には何が出来るの？」

「それは、ヒ・ミ・ツ。だって謎めいている方が魅力的でしょ？」

「そっか、でもマドが人の姿だったら・・・
どういう格好しているのかな？顔とか・・・」

「ちょっと！あたしが人の姿になったら、世の中の男はイチコロよ！」

「そうなんだ？女性じゃなくて？」

「男も女もよ！ランも、あたしに惚れちゃうから！」

「へえ？」

「あら？なにラン？疑ってるの？その時になったら驚くんだから！」

マドの話に笑いながら走っていると、視線の先に入江が見えてきた。
・
・

「マド、あそこに船がありそうね」

近づいていくと・・・数艇の舟があり、その幾つかの舟には荷が積まれている。

そして入江の出口の辺りに・・・一際大きな船があった。

ランは舟の男に近づいて聞いた。

「すみません、この舟はヨマダイの国に行かれるのですか？」

「ああ、でも舟は出せないよ。まだ死にたくないからな」

「でも、荷物を乗せていますよね？」

「ああそうだよ、ほらっ、あの船を見なよ。」

これから軍隊が、沖の化け物を退治しに行くのさ」

男が沖の出口に泊っている・・・大きな船を指差していった・・・

「無事に済めば、また川を渡って商売が出来るのさ、だから荷を積んで待っているってわけさ」

「そうなのですか」

礼をすると、ランはその軍船に向かった・・・

「ラン？あんたひょっとして・・・バカな事を考えてない？」

マドは、ランの顔の回りをグルグルと回りながら聞いた。

「ちょっと話を聞くだけ、心配しないで・・・」

軍船の近くに來たランは・・・その大きさと造りに圧倒された・・・

「すごい！こんなの初めて見た・・・」

「そう？あたし、どうかで・・・こんなのがいっぱいあるのを見た事があるわ？」

「本当に？どこで？」

「んーそうね・・・思い出せないわ・・・」

「そう・・・でも、この船なら大丈夫ね！

すぐにでも渡れるようになるんじゃないかな」

興奮気味のランは、ますます近くに寄って行った。

「おい、民間人は近づいてはならん！」

近づいてきた兵がランに言った。

「おっ？なんだ？かわいい顔して・・・お譲ちゃん、その剣はオモチャか？」

顔の大きな、少し顎の長い兵が・・・ニヤニヤと冷やかしていった。

「えっ、いえ違います！」

「ちょっと！そのあご！」

あんた達じゃ、殺されに行くようなもんでしょう！？」

マドが冷やかし返しに、自分の顎を伸ばした。

「なんだと？この船に、誰が乗るのか知らねえのか？」

「あごの顔じゃなければ、誰でもいいんじゃない？？」

マドはさらに長く・・・自分の顎を餅のように伸ばした・・・

「ワハハハ・・・なに！？こいつ！燃やしてやる！」

近くのかがり火を手につくと、マドに近づいてきた。

「ああ、違うんです！マド！謝って！」

ランが馬から降りて、マドを捕まえようとすると、ふんっ！っと、上空に逃げた・・・

「すみません、悪気はないので・・・」

「まあいい、かわいい嬢ちゃんに免じて許してやる。
それより、危ないから帰んな」

男が、かがり火を戻すと・・・視線の先に近づいてくる一団を見た。

「嬢ちゃん！そこ邪魔だ、どいて！」

突然に、ランはいわれるまま端に寄った・・・

すると、待ち構えていた兵達が一斉に整列をした。

その列は・・・船の乗り口まで続いた・・・

その一団が、ゆつくりと歩いて来ると・・・

その中に一人、

長身で・・・地面に着きそうなマントで全身を覆っている男がいた。

その男は・・・通り返る時に、

ランの馬を見、そしてランを見ると・・・フツ、と、微笑んだ。

その一団が船に乗り込むのを見届けると、ランが聞いた。

「あの人は・・・」

「ああ、獣人界の貴公子・エルード様だ」

「獣人？」

「なんだ？知らんのか？嬢ちゃん、どこから来たんだ？」

当たり前前に聞かれて答えられないランは・・・少し悔しくなって返した。

「私はミンの・・・剣術師・・・です」

「・・・そうか、まあ、良く見りゃ、それ・・・オモチャには見えんな」

刀に・・・プライドを救われたような気がして、さらに悔しくなった。
・

「お譲ちゃん、怪我しないうちに帰りな」

そう言い残すと、整列をしていた兵達は順番に船に乗り込んで行った・・・

ランは、悔しさを滲ませつつも・・・ただ見送るしかなかった。

「ちょっと！ラン！もっと言い返しなさいよ！」

マドが短い拳をブンブンと振っていると、後ろから声を掛けられた。

「ランちゃん、悔しいんだろう？だったら船に乗ろう！」

振り向くと・・・なんとそこにサルージがいた。

「サルージさん？どうして？」

「ちょっと！髭！バカな事言っんじゃないわよ！」マドが食ってかかった。

「いいから、さっ！船が出ちまうよ！」

さっさと馬の手綱を引っ張って船に向かった。

「えっ！ちよつと！サルージさん！？」

「ラン！行く必要もなくてよ！・・・ちよつと！」

サルージは、ランを置いて走って行くと・・・

船と堤防を繋いでいる・・・

橋を外しにかかっている兵に、慌てて駆け寄ると言った。

「ちよつと待つてくれ！俺も乗る！」

はあ？つと、いう顔を兵がすると・・・

「なに言っているんだ？軍人以外は乗る事は出来ない」と、断られた。

ランが追いついてサルージを見ると・・・

「我々はエルード様の御供の者です！これを・・・」

そう言いながら・・・サルージは包みを差し出した。

それを見た兵は・・・

「・・・そうか、エルード様の御供か？」と、含み笑うと言った・・・

「はい」

「まあ、それなら・・・ゴホン！・・・急げ、すぐに出るぞ！」

「すまねえ！ランちゃん、急いで！」

ラン達の乗りこんだ船は・・・

その世界に名を轟かせていた・・・

最強の名を持つ《M U S A S I》という軍船だった。

四方八方に大砲や機銃を構え、戦闘時に備えての小型から大型の戦闘艇を要し、

船の中央の辺りに、見慣れない金属で出来ている柱があり、

常に虹色に変化するその先端には・・・幾つかの星座を模した球体があった。

その回りには、魔術師と思われる数名が・・・何やら話し合っている。ラン達は、それらを見ながら船の端を歩いて後方のデッキに落ち着いた。

ランが溜息を言った。

「凄いですね・・・」

「ああ、どの戦いでも負け知らずだって話だよ！なに、心配いらないよー！」

「ちょっと！髭！ランに何かあったら責任取ってもらっわよー！」

「マド、心配いらんよ。こいつがあれば・・・どんな奴でもイチコロさっ！」

サルージは得意げに脇に抱えている銃を叩いた。

「それ・・・この間、私達を救ってくれた銃ですね」

「そうさ！魔人だろうが何だろうが、こいつで一発よ！」

「髭！調子に乗っているんじゃないわよ！」

そんなもの、本物の魔人衆には効かないわよ！」

「ワハハハ！心配するな！」

サルージの高笑いが聞こえたのだろうか・・・

あの長身のエルードが近づいて来た・・・

「ちょっと！髭！タダ乗りがばれたんじゃないの！」

慌ててマドが、ランの頭の後ろに隠れながら言った。

ランに歩み寄ると・・・エルードが馬を撫でながら聞いた・・・

「お譲さん、この馬の持ち主ですか？」

「あつ！・・・いえっ！借りています・・・あの、一緒に旅をしている人に・・・」

「そうですか・・・この馬の持ち主はどういう御方ですか？」

「えっ、あつ・・・あの・・・」

「こいつはワシの旦那の馬ですよ！」

横からサルージがいうと、得意げに馬を叩いた。

エルードは・・・サルージを相手にせずにランに聞いた。

「後ろに隠れているのは・・・一見、魔人のようだが？」

「あつ！・・・いえっ・・・この子はマドっていいいます。」

元は魔人でしたが、オラルさんの御蔭で・・・今は私の友達です」

「魔人の友達？」

「はい、魔人は・・・オラルさんが倒しました。」

この子は・・・魔人が摺り付いていた、元の人の魂みたいなものです。
・・・いつか人に戻してみせます」

「もうっランったらっ」

ランは、マドを見つめていうと・・・マドは大粒の涙を流した・・・
エルードは・・・マドを見ながら、ハル獣隊長を思い出していた・・・

「そうですか、その・・・オラルさん？とは・・・今何処に？」

「あの、あとから付いて来ていたんですけど・・・」

「なるほど・・・では用事が済んだら、

是非そのオラルさんに会わせていただきたいのですが？」

「あつ、はい・・・分かりました」

エルードは馬を撫でると、笑みを浮かべて去って行った・・・

「まったく！スカしたやろうだぜ」

サルージが言うとマドが言った。

「なにさ！いい男じゃないの！ねえ！ラン！」

「ええ、そうね。でもこの馬のことを気にしていたけど・・・」

「確かに。旦那といい、何者なんだか！？」

サルージとランが馬を撫でていると、兵達の号令が聞こえた。

「全員配置に着け！」

何やら、慌ただしくなってきた。

「ラン！あれ見て！」

マドが上空から叫んだ。

川を見ると・・・軍船の先で、小さい渦が幾つも巻いている・・・それが、段々と近づいて来るのがわかった。

「こいつの出番か！」

サルージが銃を渦に向かって構えた・・・渦は次第に・・・ゆっくりと船を囲んだ。

《バリバリ！！》

大きな音とともに、虹色の光が・見る見るうちに船の回りを包んだ・。

「これは!？」

ラン達が見上げると・船の中央にあった虹色の柱が、光を放っていた・。

それは・魔術師達が柱を囲み、それぞれが手や杖を翳して、船全体を包むように結界を創っていた。

「何が起るの!？」

「分からないが、タダごとじゃ無さそうだ」

渦は・様子を見ているのだろうか?しばらく動かなかった。すると・。

「砲撃用意!」

砲台の指揮官が声を上げた。

それぞれの砲台が渦に狙いを定めた。

「撃て!」

一斉に渦を目がけて放たれた!

・がっ、波しぶきを上げただけで終わった・。

「どうなった?」

兵達が見ると、それぞれの渦の中心から・・・
撃ちこんだはずの砲弾が水面に出てきた。

そして水柱が砲弾を持ちあげて、伸びると・・・その高さは船を見
降ろした。

すると・・・何処からともなく声が聞こえた。

「こんなもので・・・何をしようというのだ？」

言い終えると、水柱が弓状にしなり・・・一斉に船を目がけて砲弾が
放たれた。

《ドォーン！！バシバシ！！》

砲弾は・・・船の結界に弾かれた・・・

「残念だったな！この結界の中には、誰も入る事は出来ないのだ！」

指揮台から・・・船長が得意げに言い放った。

やがて砲弾の煙が消え、水柱がゆっくりと下がっていくと、
それは船の指揮台の高さ辺りで、人の形に変わった・・・

「ランちゃん、何だ、あれ？」

サルージが船の回りを見渡すと・・・同じモノが幾つもあつた。
その指揮台に一番近い水柱の一つから、
さらに黒い水を纏った人の姿をしたモノが出てきた・・・
それが言った。

「わざわざ殺されにくるとは・・・人間とは愚かな生き物だな」

「あいつは!」

エルードがデッキを駆けあがると、指揮台から身を乗り出した。

「さて、今回は御たいそうに、そんな物持ちだして・・・私を倒すつもりか?」

すると、エルードの隣にいた船長がそれにいった。

「お前か!こんな幼稚な事をしているのは! つまらない奴だ!とつと失せろ!」

黒い水は、結界に近づいて言った・・・

「ほぅ?幼稚でつまらん、と言ったな?

ずいぶんと威勢がいいが・・・何か私を倒す秘策でもあるのか?」

「ワハハハ、秘策も何も、お前のような奴が我々を倒せると思っているのか!」

「そうか?そこまで言うのなら・・・ちよつと、試してみることにしよう」

言い終わると《ザッパーン!》と、

水柱が全て崩れて、川は何も無かったように元の姿に戻った・・・

「なんだ、我々に怖気づいて・・・とうとう逃げ出したか!」

船長が笑いだすと、兵達も続いて笑い出した。

「誰が逃げ出したって？」

「・・・なにっ！・・・どこだ！」

皆が一斉に声の主を探すと・・・砲撃主の一人が・・・船長を見た。
その砲撃主の目は黒く光っていた。
すると、ゆっくりと船長に向かって歩き出した・・・

「なんだ！・・・おい！止まれ！」

「俺を倒すと言ったな？やってみろ！」

砲撃主が指揮台に近づき・・・階段に手を掛けて、一歩その階段を上
がった時、

船長に付いていた魔術師が杖を翳し、
いきなり火の玉を放つと、砲撃主に直撃した！

「がああああ！・・・」

砲撃主は・・・見る見るうちに焼け焦げて蒸発していった・・・
後には水が少し残っただけであった。

「ワハハハ！口ほどにも無い奴め、思い知ったか！」

高笑いをする船長を尻目に、エルードはその水を見て・・・思い
だした。

「こいつは、あの・・・まずい！」

エルードは、咄嗟に指揮台から飛び降りた！
つと、同時に・・・その水がウネり始め、人の水柱に姿を変えた。

「きつ！きさまっ！・・・この結界の中には・・・誰も入れないはず
！」

「なにを脅えているのだ？わざわざ出向いてやったのだぞ？」

「おいっ！何とかしろ！」

船長は魔術師の後ろに隠れていった。

「なんだ？なぜ隠れる？俺を倒したいのだろうか？どうした？」

かかってこい、という仕草を水柱がすると、
構えていた魔術師が、船長と共に結界を張った。

「守っているだけでは・・・戦えないではないか？」

水柱が結界に手を翳すと、黒い水が一気にその結界を包み込んだ！
船長と魔術師を包んだ水は・・・スルスルと上空に伸びていった・・・

「なんだ！おい！やめろ！」

次の瞬間！パツと、包んでいた水が弾けた！
すると二人は・・・引力に従ってそのまま落下し、甲板に叩きつけ
られた！

「がっ！・・・はっ・・・」

船長と魔術師は・・・そのまま息絶えた。

それを見ていた者達は・・・声を失った。

「なんと？もろい奴だ？所詮、口だけだったな・・・
さて？その魔術師ども！次はどうする？」

魔術師達は・・・態度を変えて言い始めた。

「・・・我々はあなたに従います。ですから命だけは御救い下さい
！」

それを聞いた兵達も、武器を捨てて口々に叫んだ。

「お願いします！どうぞ命だけは！」

「助けてください！」

「そうか？助けて欲しいのか・・・ならばそれなりに代償を、払ってもらおうぞ？

そうだな・・・その魔術師どもを殺した奴だけ、助けてやろう！
・・・1・・・2・・・4・・・8・・・8人だ、

それ以外は死んでもらおう！さあっ！早い物勝ちだ！」

それを聞いた兵達は・・・武器を拾うと魔術師達を囲んだ・・・

「やめろ！お前達！敵はあいつだ！」

それに聞き入る兵は一人も居る筈もなく・・・追いつめられていった。

「いいぞ！！！！これは見物だ！さあっ！やれっ！
・・・えっ？・・・なっ！・・・なにっ！・・・」

「どうした？」

「なんだ・・・？」

異変に気がついた皆が・・・水柱を見ると・・・
胸から真つ二つに分かれて《バシャバシャ》と音を立て・・・水柱は崩れていった。

そして《シュウシュウ》と水が蒸発していき・・・後には何も残らなかった。

下から見上げていた者達には、
指揮台の水柱の後ろにいたエルードの姿は見えなかった・・・
が、やがて・・・獣人となり、剣を構えたエルードが姿を現わした・・・

「おおっ！すごい！」

「エルード様！」

「さすがエルード様だ！」

一瞬で倒したエルードに、皆が称賛の声を上げた！

「・・・何だ？ランちゃん、俺達の出る幕は無かったな」

「えっ？いえ・・・エルードさん・・・あれが獣人・・・すごい!？」

「なによ！ラン！あんたの刀はもつと凄いいんじゃなくて！」

「・・・マド、私・・・自信ない・・・」

「どうしてよ！？見た事無いからでしょう？もつと自分を信じて！」

「そうだよ、ランちゃん！旦那がその刀をくれたんだろう？」

「ランちゃんを見込んで、くれたんだからさ！」

「・・・でも」

ランが言葉に詰まっていると・・・声が聞こえた。

「その獣人！！俺の分身を倒したぐらいでいい気になるなよ!!」

「なんだ！」

それは・・・船の側面から黒い水が這うように伸びてくると、いきなり魔術師の一人に襲いかかった！

「ぐわっ!・・・がっ!・・・」

黒い水が魔術師の口から入っていくと・・・魔術師はその場で倒れ込んだ。

「うわっ！」

「どうした!？」

すると・・・ビクン!と、体を震わせると・・・直立のまま起き上った。

「なんだ!」

「おい!逃げろ!」

逃げ出す兵を見ながら、摺り付かれた魔術師がいった・・・

「この体は・・・色々と妙な技を使えるらしい・・・試してみよう」

すると、杖を甲板にドンツ!と、突いた。

その瞬間バチバチと、赤い雷が広がり・・・

その回りにいた者は、痺れて倒れた・・・

「・・・まずいな、ランちゃん!そこに隠れよう!」

サルージは、砲台の横に積んである・・・荷の影に馬を引いていった。

「なによ!ラン!あんな奴、やっておしまい!」

「マド!黙って!」

ラン達は、隠れながらも隙間から覗いた・・・

「獣人、その剣をどこで手に入れた?

分身とはいえ、一切りで片づけるとは・・・放ってはおけんな」

「魔人よ、俺を知らないのか？」

「なに？・・・知らんな」

「そうか、ならば教えてやろう・・・俺はエドス参謀の配下、エルードだ」

「エドス・・・！！きさま、あの場にいた獣人か！！」

「そうだ！だがお前とは戦っていない。
だがお前の倒し方は・・・エドス参謀が教えてくれた」

「・・・なるほどな・・・そうか？」

「だが倒し方を知ってその気になっているようだ・・・
私も・・・お前らの倒し方を学んだぞ。」

「それに・・・今回はお前一人ではないか？残念だが、お前に勝ち目は無い！」

「・・・そいつはどうか？・・・おい、ハル獣隊長はどこだ
！」

「なに？あの召使の事か？・・・あいつには別の仕事をくれてやった。
今頃港は・・・火の海にもなっている頃だ」

「なんだと！・・・そうか？・・・おい！船を港に戻せ！
・・・着くまでにこいつを始末する！」

エルードは下にいる兵に合図をした。

「はっ！はい！・・・すぐに！」

「何を戯けた事を？今頃戻っても遅いわ！」

・・・エルードとか言ったな・・・俺を始末するだろ？」

「・・・そうだ、手加減するつもりは無い！」

すぐに終わらせてやる！・・・いくぞ！！！」

エルードは指揮台から飛び出すと、魔人目がけて切りかかった！

ランの師匠

その頃、オラルとスーランは港の手前まで来ていた。

「ランちゃん達、何処まで行っているのかしら？」

「そうだね、だいぶ張り切っていたからな」

「ねえ、あの港にいるんじゃない？」

「ほらっ、ちょっと遠いけど・・・あそこでたき火しているし・・・人が集まっているんじゃない？」

「たき火？・・・そうか・・・行つて見よう」

二人が港に、だいぶ近づいた時・・・

何かが飛んでくると、それは街道の脇に落ちた。

すると、その一帯が見る見るうちに火の海と化した・・・

「ちょっと！なにこれ！？」

「たき火の正体だ！・・・行くぞ！」

「あっ・・・ちょっと待って！」

オラルとスーランが走って行くと、港からから逃げて来る人達とすれ違った。

（何があつた！？・・・）

そして港に着いた時には・・・一帯は既に火の海と化していた・・・

「誰がこんな・・・」

「見て！あそこ！」

スーランが燃える建物の中から出てきた・・・一匹の黒ヒヨウを見つけた。

「あいつか？・・・」

黒ヒヨウがこちらに気づき・・・

オラルと目が合うと・・・走り出して向かってきた！

「こっちにくるよ！」

「スーラン、下がっていてくれ・・・」

そういうと・・・黒ヒヨウに向かって歩き出した。

黒ヒヨウは、オラルの少し手前で止まると・・・
いつでも飛びかかれる態勢を取った。

その黒ヒヨウにはめられている・・・

赤く光る首輪を見て、オラルは話しかけてみた。

「・・・お前、誰かに操られているな？・・・聞こえるか？・・・
俺が元に戻してやる。だから動くなよ！」

そう言いながら・・・黒ヒヨウに近づいた。
が、黒ヒヨウは瞬時に飛び掛かると、その鋭利な牙がオラルの首に
食い込んだ！

「オラル！」

スーランが駆け寄ると、オラルは黒ヒヨウを抱いたまま振り向いた・
・

「大丈夫だ、スーラン・・・こいつの呪いを解いてやる」

「大丈夫って！・・・それっ・・・」

スーランはオラルが首から血を流し・
なおもその牙が食いちぎろうとする様を見て、
どうして大丈夫なの！？と、顔を覆った・

それを見たオラルは・・・黒ヒヨウを抱いたまま、その首輪に噛みつ
いた。

すると・・・オラルの全身から黒い煙が立ち込め・・・姿が見えな
くなった。

スーランは何が起きているのか分からずに、その場に崩れ落ちた。

黒い煙を潮風が徐々にをさらっていくと・・・
そこには男の人を抱えたオラルが・・・何も無かったように立ってい
た。

噛まれたはずの首の傷もそこには無かった。

「・・・オラル！」

スーランは、何が起きたのか分からなかった・

「・・・ひょっとして、心配をしてくれたのか？」

「・・・ばか！」

スーランは涙を堪えつつも・・・安堵の表情を浮かべていた・・・
オラルは、その人をそつと下ろすと軽く頬を叩いた。

「おいっ・・・おいっ・・・」

すると男は・・・薄っすらと目を開けた。

「・・・んっ？・・・ここは・・・あなたは・・・」

「・・・よかった、気が付いて・・・」

スーランは持っていた水を男に飲ませた。

それを飲み終えると、すうつ、と、大きく息をして二人を見た。

「・・・何か、ひどく悪い夢を見ていた様な気がします・・・」

これは・・・いったい？・・・」

視界が開けた男が見たものは・・・焼け野原となっている港だった。

「ああ、なにかの争いがあつたらしい・・・」

「・・・わたしは何を・・・何をしたんだ！？」

以前の記憶が少しずつ戻って来ると・・・
恐らくこれは自分のやった事だ！と、感じた。

「あんたは何もしちゃいないよ・・・誰かに操られていたんだから・・・」

「・・・そうか・・・あの魔人！あいつの手に掛かり！
・・・なんてことを！！・・・」

完全に以前の記憶を取り戻すと、悔し涙を流した・・・

「なら、そいつに借りを返さないと！何処に居るか・・・思いだせるか？」

「・・・ああ・・・確か・・・そうだ！船だ！船をつ！」

男は力強く立ち上がると港を見まわした。

「・・・ない・・・大きな船、いや・・・あれは確か、軍艦だ！」

「軍艦か・・・ここに無いとすると、恐らく出て行ったんじゃないかな？」

「くそっ！・・・あいつだけは！・・・あいつだけは！絶対に許さない！」

「・・・ねえ？ひよつとしてランちゃん達・・・」

「・・・ああ、たぶん・・・恐らくサルージも一緒だ・・・
どこかにまだ使える舟があるはずだ、手分けして探そう！」

その頃、《MUSASI》のエルードと魔人は互角の戦いをしていた。

「獣人よ、なかなかやるではないか・・・だが本気でその程度なら俺には勝てんぞ」

「・・・確かに、このままでは決着はつきそうも無いな。だが、どうやらお互いにまだ手の内は隠してあるようだ、違うか？」

「ああ、そうだな・・・どうやらお前はそこいらの獣人とは少し違うようだ・・・」

しかし、港に着く前に俺を倒すと言ったな？それを証明して見せろ！」

「言われなくとも！」

再び二人は激しく刃を交えた・・・

「エルードさん・・・大丈夫かな・・・」

「大丈夫だよ、ランちゃん。

いざっ！って、時にはこいつが火を噴く！任せてくれっ！」

よほどの自信があるらしく・・・サルードは銃を見せた。

「へんっ！そんなモノじゃあいつには敵わないよ！ただ水に穴開けておしまいだよ！」

「そんなことはない！・・・だったら試してみるか？！」

「駄目ですよ、サルージさん！エルードさんの邪魔をしちゃ！」

「いいから！見ておけて！」

サルージは撃ちたくて仕方ないといった感じで、荷の隙間から狙いを付けた。

「・・・魔人よ・・・次に止まった時がお前の最後だ！」

サルージは照準を合わせた・

「なにいつているの！サルージさん！だめ！」

「ちょっと！髭！バカな事はおよし！」

指揮台の上で、魔人の一振りをエルードがヒラリと飛びあがってかわした時、

魔人に一瞬のスキができた・

《後ろを向いた！今だ！》

「くらえ！」

サルージが引き金を引いた！

《ドドドドドドドッ！！！》

それは・・・いつものような光速のエネルギー波ではなく、

油のようなドロドロとしたモノが・・・波をうちながら魔人に向かっていった。

魔人は反射的にその音に気付くと、振り向いた。

「なんだ！」

それは軽くかわせるほどの速さだった。

すうつ、っと、体を反らして避けると・・・サルージを凝視した。

「・・・きさま！死にたいらしいな！」

魔人はエルードとの戦いを邪魔されたのが気に入らなかったらしく、腹を立てて言った。

「だから言ったでしょう！」

「ばかつ！ばかつ！髭！」

とうとう見つかってしまったラン達は・・・逃げ場を失った。

「なんで！こんなはずは・・・」

「髭！なんとかしなよ！」

「くたばれ！」

魔人は胸元に、黒く光る玉を造り出した・・・

「まずい！」

エルードは、その尋常ではない玉の威圧感を感じると、ラン達の元へ飛び出して行った。

「・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・これは？」

魔人の動きが止まった・・・

良く見ると・・・魔人の足もとから蒸発して消えていつているのが分かった・・・

「なんだとー!!」

その蒸発して消える速さに、

このままではまずい！つと、身の危険を感じた魔人は
下半身まで消えかけた時・・・魔人は自らその胴を剣で斬り払った！

「きさま！このままではすまさぬ！覚えておけ！」

そう言い放つと・・・片手で指揮台を掴み、力任せに勢いよく川に身を投じた・・・

「ちょっと、なに？・・・・・・・・どうしたの？」

エルードは魔人のいた指揮台に飛んだ。

見ると・・・蒸発は下の水までも徐々に消しながら進んでいた・・・

「そういうことが・・・・・・・・」

エルードは理解した・・・

そこへラン達が駆けよって来た。

「エルードさん！今のは！？・・・」

「ああ、どうやらその銃に救われたらしい・・・」

サルージの銃を見て答えた。

「えっ？・・・こいつが？」

「あれがさっき銃から出たモノの正体だ・・・」

エルードは船の縁に付いているドロドロとした液体を指した。
その液体は徐々に蒸発して消えた・・・

「エルードさん、それがどうして・・・」

「・・・私も詳しい事は分からないが、
どうやらその液体には、付着したモノを消滅させる力があるらしい・
・・・」

「なぐるほど！・・・って、そうなの！？・・・こいつはすごい！」

サルージは改めて銃を持ちあげていった。

「・・・ちょっと！それ！髭にはもったいないんじゃない？！」

「でも、以前、私達を救ってくれたのも、その銃の御蔭ですもの・
・
なにか不思議な力がありそうですね」

「・・・たしかに・・・旦那も詳しい事は教えてくれないし・・・ランちゃんも、その刀・・・そうだろう?」

「・・・はい」

「その方は・・・オラルさん?とか言う方ですか?」

「はい、そうです」

「そうですか、その方に会つのが楽しみになってきました」

ランを見てエルードが微笑むと、少し照れ笑いをして返した。
そこに兵がエルードに近づくと指を指して言った。

「エルード様、小舟が近づいて来ています。いかがいたしましたしょう?」

「小舟?・・・」

船の縁から兵の指差す方に目を向けると・・・

「だんな!・・・スーランさんも!」

「オラルさん!・・・よかった」

「・・・あれは!・・・まさか、ハル・・・ハル獣隊長!!!」

小舟からオラル、スーラン、ハルの順に梯子を登って甲板に降

り立った。

「ハル殿！」

エルードはハルに駆け寄ると、手を握り締め・涙を流して喜びを表した。

「・・・エルード！・・・どうしてここに！？」

突然の再開にハルは目を疑った。

「はい！・・・この川にあの、例の魔人が・・・それでエドス参謀より、私が遣わされました・・・」

「そうだったのか・・・すまなかったな・・・」

「・・・いえ、御無事でなにより！」

「・・・それより、もう、戻っては来られないのかと思っていました！」

「・・・ああ、私もそう思っていた・・・こちらのオラル殿に救われた」

オラルは二人に近づくと会釈した・

「オラルと申します。こちらはスーランです」

「スーランです・・・」

「オラル？・・・あなたが・・・何と感謝をすれば良いか・・・」

再会を分かち合っているエルード達をよそ眼に・・
スーランがキヨロキヨロと辺りを伺った。

「それより、ねえ?・・・
誰か馬を連れた女の子と・・髭スラの男を見なかった?」

「・・・ひょっとして」

エルードが物陰に隠れているラン達を見た・・

するとサルージ達は・・頭を掻きながら出てきた。

「サルージ・・・」

「ラン! やっぱり!・・・」

「だんな、すいません!・・・ちよつと訳があつて・・・」

そこにマドがサルージの髪を引っ張りながら言った。

「この髭! のせいで死ぬところだったのよ!」

「・・・サルージ、また何か悪さをしたんじゃないのかい?」

慌てて手を振ると・・

「だんな! そうじゃなくて!・・・信じて下さい!」

そこにエルードが被せてきた・・

「先ほど・・・サルージ殿・・・いや、その銃に救われました。不思議な銃です。」

聞けば、オラル殿より預かり受けたモノと聞いていますか？」

エルードがジワリと確信を突いて来た。

「・・・その銃は、誰でも扱えるモノではないのです。そいつは使う者、相手によって能力が変化する・・・ただ、まだサルージは本当の使い方を知らない・・・エルードさん、試してみますか？」

「・・・いえ、そういうものでしたら・・・やはりサルージ殿がふさわしいでしょう」

エルードがサルージの顔色を伺うと・・・

「・・・アハハ・・・まだ使い方を知らないのです・・・かつ・・・確かに・・・」

こいつが勝手に倒してくれているようなものだからな・・・アハハ」

悔しいような悔しくないような、複雑な笑みを浮かべていた。

そんな中、ハルが改めてオラルに面と向かって話かけた。

「しかしあの魔人・・・相当な痛手を負ったとはいえ、そのうち又、どこぞ、に現れるでしょう。」

以前、エドス参謀との戦いでも・・・

一月ほどで回復していたのを私は見ていた・・・

オラル殿、どうであれ私はあなたに救われた。ぜひ、礼をさせて頂きたい」

「いえ、礼なんて・・・」

「ハル殿、私が・・・」

エルードがハルに目配せをすると、鳥獣に姿を変え飛んでいった・・・

「・・・えっ？・・・あの人・・・鳥？・・・」

スーランが言うとハルが答えた。

「お譲さん、獣人を・・・御存じ無いですか？」

「あつ、いえ・・・」

「さてはスーラン？惚れたな？」

オラルが冷やかしかし気味にいった。

「やだっ、そんなことないよ！」

「・・・スーランさん・・・分かりやすい・・・」

港に着いた一行は、焼け野原となった地に降りた・・・

「どうしたの！・・・これ・・・」

ラン達は、港で何が起きていたのかわからなかった。

「ひどいな・・・戦でもあったのか？」

そういうサルージにハルが・・・

「すまない・・・これは・・・私のやったことだ・・・」

ええっ！どうして！？つと、驚いているラン達にオラルがいった。

「まあ、訳は後で、

それよりもサルージ？

今日の宿はどうした？そろそろ日が沈むぞ・・・」

「・・・ああっ！・・・すぐに探して来ます！」

ランも慌ててサルージに付いて行こうとしたのを、ハルが止めた。

「宿の手配は、そろそろエルードが戻って来るでしょう・・・」

ハルがそう言うと、それから間もなくエルードが戻って来た・・・

「すまなかった、エルード。で、どうだった？」

「はい、隣街に宿をお願いしました。このまま街道沿いに進むとスグです」

「助かる、ではオラル殿・・・色々と積もる話をしたいのですが？」

「では遠慮なく・・・良かったな、サルージ」

「はい・・・ハル殿、助かりました・・・」

「では行きましょう」

ハルが声を掛けると、エルードがハルにいった。

「ハル殿、私はこれからエドス参謀に伝えに行きます・・・」

「・・・そうか・・・では、ご迷惑をお掛けした、と、伝えてくれ・・・」

私はオラル殿と暫く一緒に行動を共にする・・・」

「ハル殿?・・・」

「オラル殿、この救われた命・・・少しでもお役に立たせて頂きたい。アルミアに戻るまでの間、私のわがままを聞いてください」

その真剣な眼差しを見ると・・・オラルも同様に返した。

「・・・いえ、わがままなんて。どんなに助かることでしょう。・・・では、一つ御願があるのですが・・・」

「おお!何でも言っして下さい!」

「・・・この・・・ランにご教授を頂ければ・・・剣術、世の中の理などを・・・」

「・・・わたしの?」

ランはオラルを見つめた。

「そのような事でよければ、喜んで御引き受けします」

「助かります。」

実は、ランの持っている力を引き出してくれる方を探していました。ラン・・・ハル殿なら間違いなく、一流の剣術師に育ててくれる・・・」

「あつ、・・・はい！・・・よろしくお願いします！」

突然の成り行きで剣術の指導者ができたことに、ランは嬉しさを隠しつつ、深々と頭を下げた。

「こちらこそ・・・ではエルード、よろしく頼む！」

「はい、ハル殿も御無事で！」

皆の顔を見て礼をすると飛んでいった・・・
スーランはエルードを誰よりも大きく手を振って見送った・・・

魔人国：ザルギス

魔人国：ザルギス

世界の中でも唯一、魔人だけが住まう大陸国ザルギス・・・

その大陸は海に囲まれ、他の一切のモノを寄せ付けなかった。

岩山がそびえ立つ内陸の、その地下深くには、

魔人の中でも特に選ばれた《闇の十人》と呼ばれる者達がいた・

・

魔人の中でも、その頂点に立つ彼らは・・・

他の魔人には尊敬され、

それを知る一部の人間と獣人は、その存在を恐怖と捉えていた・・・

その神殿の大広間の神座には・・・

人間と獣人の・・・恐怖に怯える姿の彫刻が施されており、

中心の大きな椅子は、何やら骨を組み合わせたような造りであった・

・

その椅子に全身を黒い衣で覆った魔人が座り、

一人の魔人を、その赤い目が見つめていた・・・・・・

「ほぅ、それで・・・おめおめと逃げ帰って来たと言うわけか？・・・

・

見てみる、皆が笑っておる・・・のう？ジュール？」

神座の下には・・・上半身のみ姿のジュールがあり、それを囲っている八人の黒装束の魔人達は、ジュールの姿を見ながら体を揺らしていた・・・

「ハデス様！決して逃げ帰った訳では！・・・この体を修復し、必ず奴らに復讐するため！そのために生き恥をさらして戻って来たのです！」

「・・・二度もやられてまだ懲りぬか？どうやら我々の組織の一員には相応しく無いようだ・・・」

「ハデス様！・・・次は、とは言いません！最後のお願いです！・・・どうか！・・・」

それを聞いた《闇の十人》の中の一人が言った。

「ハデス様、どうぞ最後の機会を御与え下さい。次もまたジュールが役目を果たせないようであれば、このダイムが責任を持って処罰致します」

「・・・そうか・・・いいだろう・・・ではジュールよ、最後の役目だ・・・その人間と獣人共を消したのち・・・アルミアまでを我に差し出せ、よいな！」

「はっ！必ずや手に入れる事を約束致します！」

砂漠の都：ヨマダイ

砂漠の都：ヨマダイ

オラル、スーラン、サルージ、ラン、ハル獣隊長の五人は、ひと時の平穏を取り戻したイタール川を渡り、ヨマダイ国に入った。

ヨマダイ国は砂漠に覆われ、イタール川の周辺と、砂漠の都市メイロに関しては唯一、水の恩恵を受け、国家を支える重要な土地であり、また、多くの産物を生みだしていた。

ヨマダイから先には陸地が無く、大海が包み込んでいた……

「だんな、見てください……ここから先は何処を見ても砂しかありませんよ。」

それでも……その《メイロ》に行かれるのですか？」

オラル達一行は、イタール川から首都メイロに続く砂漠の街道の入り口付近に着いていた。

「ああ、だけど見事に緑地と砂漠に分かれているものだな……ハルさん、ここからメイロまでは……どれくらいかかるのですか？」

「そうですね……私一人の時は二日ほどで着きましたが……荷を馬に乗せて……三日ほどみておけば……でしょうか」

それを聞いたスーランは、ランの肩を寄せてハルに言った。

「三日？あたしとランは・・・シャワーが無いと駄目でしょ！？
野宿は御肌の敵だから」

「スーランさん、私は・・・」

するとマドがフワフワ浮きながら・・・

「オバン、たまにはいい事言うのね。

レディーの身だしなみを忘れてもらっちゃ困るわ」

ハルに向かってそう言う・・・

眉間をヒクヒクさせたスーランがマドを捕まえて・・・

「・・・誰がオバンだって？！あんたはシャワーとか関係ないでしょ！」

と言いながら雑巾のように絞って伸ばした・・・

「・・・んん！・・・ヒョツと！？・・・やめっ・・・このっ！？・・・ぐっ
んんっ！」

相変わらず・・・と、

そのやり取りを見て笑っていたオラルが、サルージの肩を叩くと言った。

「スーランもランちゃんも心配しなくていいよ、
このサルージ様が解決してくれる！なっ、サルージ！」

「・・・そう言われるんじゃないかって、思っていましたよ・・・」

「そうか・・・いつもすまないな、

明日には・・・ここを発ちたいから、そのつもりでよろしく！」

いいように使われるサルージを見かねて・・・役に立ちたい、と
ハルが 私と一緒に・・・

と、言ってくれたが・・・オラルが修行の一環だから・・・と断った。

サルージは・・・来た道を戻ると、川沿いの店を探して回った・・・

「・・・スーランがシャワーを浴びる所は見てみたいが・・・
いかん！いかん！今度こそ黒焦げにされてしまう！」

妄想しつつも《あわよくば》と期待をしつつ探していると、
荷を積んでいる船を見つけた。

馬車から舟に荷を運ぶのを、小さい男の子が手伝っていた・・・

「おっ？あの馬車・・・使える！」

駆けだして近づくと、荷を積んでいる男に聞いた。

「よう兄弟！景気はどうだい？」

「・・・なんだ？仕事の邪魔をせんでくれ・・・」

男はサルージを見るや否や・・・不機嫌な顔をして荷を運んだ・・・
調子に乗って聞いた事を少し後悔しつつも続けた。

「すまねえ・・・ちよいと聞きたい事があつてな、すまんが・・・この馬車を売っている所を知りたいのだが？」

「・・・そんなところは無い・・・みんな自分で造るんだからよ・・・」

「そいつは知らなかった・・・何とか明日までに手に入れたいのだが・・・」

金なら用意出来るんだ・・・どこかに無いものかな」

金？と聞いて少し興味を持ったのか男が聞いた・・・

「・・・幾らなら用意出来るんだ？」

「・・・うちのだんな次第だが・・・」

たぶん、あんたの言い値で用意出来ると思う」

「そうか・・・ちょっと待っている」

男は荷を全て積み込むと、船頭に合図をした。

子供を馬車に乗せると、ゆっくりとミンに向かう舟を見送った・・・

サルージは、揺れる馬車の荷台で子供の相手をしていた。

「髭のおじちゃんは何処にいくの？」

「ああ、明日にはメイロにいくつもりだ」

「いいな～ねえ、パパも一緒に行くの？」

「いや・・・パパはこの人にこの馬車を売るんだ・・・そしたらメイロに行く。」

「ママも、お婆ちゃんも御爺ちゃんも待っているからな！」

「ほんと！やった！ママに会える！髭のおじちゃんも一緒にいくの？」

「いや、それはどうかな？・・・」

「どうして？メイロに行くんでしょう？みんなと一緒に行けば楽しいよ！」

「・・・そうだな、じゃあワシの旦那に聞いてみることにするかな」

「サルージを乗せた馬車は、オラル達の待っている場所に近づくと・・・サルージは指を差して言った。

「ジュンさん、あそこで待っているのが旦那達です」

「・・・若い娘もいるようだ・・・あんた達、何やっている人なのだい？」

「まあ、話せば長くなるが・・・詳しい事は旦那達に聞いてみてくれ」

馬車がオラル達の前で止まると、サルージが荷台から降りた。

「・・・サルージにしては随分早かったじゃない？ねえ、オラル？」

「ああ・・・ところでサルージ、そちらの方は？」

「はい、この馬車を売ってくれるジュンさんです。
この子はジュンさんの子で、アラトって言います」

馬車を降りたジュンは、アラトを寄せるとオラルに話した。

「・・・馬車を買ってくれと聞いたので来ました。

私達親子は、この売ったお金で家族の待っているメイロに行くつもりです。

小さい家ですが、もう一つ馬車があります。

そちらの方が・・・これよりも大きいので、よければそちらを持ってきます・・・

メイロに行くには、水や食料を積んで行かなければなりませんので、よければ樽やテントも準備できますが？」

「・・・旅の支度は、全て出来ると？」

「はい、メイロは住むには良い所ですが・・・仕事がありません、
ですので季節毎にこうして出稼ぎに来ているわけです」

「パパ、この人達も一緒に行くの？」

アラトがジュンの顔を見上げて聞いた。

「・・・いや、そうではないが・・・」

ジュンはオラルを見ると聞いた。

「メイロに行くのであれば、道案内をしましょうか？
はじめて行くのであれば・・・五日はかかります。

私は道を知っていますので、三日で行く事ができます」

「・・・そうですか・・・ハルさん、どうですか？」

オラルは・・・ハルが人一倍洞察力に長けている事を知り、このジュンという男を、

出会った時から注意深く観察していたので・・・聞いてみた。

「この方の好意を受けましょう。」

準備して頂けると、何より道を知っているというのは心強いです」

「そうですね、ではジュンさんをお願いします」

「わかりました。では明日の早朝までに準備をしますので、よろしければ私の友人の宿があります。

今日はそちらに泊って頂ければ・・・」

「そうですか。何から何まで、厄介になります」

朝靄の残る頃、二台の馬車にオラル達の馬を付けると、

旅の支度を終えて乗りこんだ一行は、ヨマダイの首都メイロを目指した・・・

いよいよ緑の地から砂地へ・・・という頃にサルージが呟いた。

「俺も、ジュンさんの馬車に乗りたかった・・・」

ジュンの馬車には・・・

御者のジュン、隣にアラト、そして荷台にはスーランとランが乗っていた。

サルージは・・・もう一台の馬車の荷台に乗っていた。
御者のハルと、隣にオラルがいたが、

二人はそれを聞くと、まったく、しょうがない奴だ、と言わんばかりだった・・・

だいたい日も照りつけてきたので、

それぞれ馬車の荷台の上に・・・日よけの布を被せた。

ジユンが少し遠くの岩山を指して言った。

「皆さん、あの山の麓で休憩をしましょう」

山の麓に近づくと、山の日陰の重なる場所を選んだ。

「ふううそれにしても暑いな、こんなに違うものかい？」

サルージがジユンに聞いた。

「このヨマダイは、元々緑の豊かな土地でした・・・
それが10年ほど前から・・・

地の底からの熱によって植物が育たなくなってしまった。

そのために川の水の届かぬ所は、全て砂漠と化してしまった・・・

この辺りも、当時は普通に人々が生活をしていたのです・・・

ヨマダイだけではなく、

他の国でも同じような事が起こっていると聞いています・・・」

「そうだったのか・・・」

「ここから見える所、全てが緑豊かな土地であつたのに・・・」

一行は、道なき砂の平野をジュンの案内で進んだ・・・

「ジュンさんの案内が無ければ、この辺りで迷子になっていたかも・・・」

荷台から立ち上がると・・・

見渡す限り・・・何も見えない砂漠でスーランがジュンに話かけた。

「私は、砂漠になる前の光景が焼き付いていますから・・・始めて来てこの状況だったら・・・私も迷っていたでしょう」

「・・・ああ、こんなとき、エルードさんのような翼があったら・・・もう着いているころね」

スーランは両手を羽ばたかせてみた。

「お姉ちゃん、誰？それ？」

アラトがワクワクして聞いた。

「エルードはね、獣人なんだけど大きい翼を持っていて・・・空を自由に飛べるの！うらやましい！」

はしゃぐスーランに・・・

マドが「負けてたまるか！」と、言わんばかりに声を張った！

「あんなスカした奴の何処がいいんだか！？」

私の方が何倍もいい男なのに！」

スーランが「ふんっ！」とすると・・・

「あんたはフワフワ浮いているだけでしょうが！偉そうに言わないの」

それを聞いたマドは暑さも手伝ってか・

「そんなことないわ！だったら見てなさい！」

そういうと・・ランの腰から両手の間を八の字に体を伸ばして結び、それらが鈍い光を放つと・・・ランの背に大きな翼が現れた・・

「うわっ！なにそれ！・・・」

突然の変わりように、スーランだけでなく一同の目がそれに釘づけになった。

「ラン！飛ぶわよ！」

「えっ！・・ちよつと！・・まっ・・」

マドは翼を大きく羽ばたかせると・・・ランは空中から小さくなつた馬車を見ていた。

「・・・マド！？・・」

「大丈夫よ、私に任せて！」

そういうと、大空を自由自在に飛び回った・・

「・・・あいつ、隠していたな・・」

それを見ていたオラルが、ボソツと呟いた。

皆が馬車から降りて待っている所へ、
上空から降りてきたランとマドは、ご機嫌だった。

「どう？びっくりしたでしょう？」

マドはスーランに得意げに言った。

「・・・あんた、黙っていたね・・・他にも何ができるんだい!？」

「あら？呼び方が違うんじゃない？マ・ド・様、でしょ!？」

スーランは、どうにかしてやろうと構えた時・・・

「すっげー姉ちゃん達、何者？」

アラトが初めて見る光景に、目を輝かせて聞いてきた。

「私達はね・・・なんだろう?・・・良くわかんない」

「へーすごいんだ!」

子供のアラトには・・・見るもの全てが好奇心の対象になっていた。

そこに・・・

「マド、良いモノ持っているな。」

他にも何かに姿を変える事が出来るのか？」

オラルが、その翼を触りながら聞いた。

「んっ!？」

オラルを見て、しまった!っと思つた時には・・・おそかつた。
オラルは面白いオモチャを見る目で・

「例えば・・・ここに居る全員を、乗せて飛べるモノとか?」と、聞いて来た。

マドは必死に弁解をしようとした。

「そんなことはできないわっ!ランだけよ!」
「・・・なによ、あなた達・・・」

冷やかな視線を浴びるマドは・・・ゆっくりと元の姿に戻っていった・

「ランだけ?・・・だけ・・・って何だ!？」

オラルが両手でマドを掴むと、じつとマドを見た。

「いや・・・だから・・・あの・・・」

目をキョロキョロさせていると・・・

「・・・ランちゃん、何か聞いているかい?」

オラルはランに視線を向けた。

「えっ！？・・・いえ・・・私は・・・」

ランはマドとの約束した事を思い出していた。

「・・・そうか」

オラルはそれを察してか・

手を離すと、マドはフワフワとランの頭の上に落ち着いた。

「ちょっと！縛りあげて吐かせようよ！」

スーランは納得出来ない風で言った。

「・・・まあ、それは次の楽しみに残しておこう
・・・さあ、まだ先は長い」

そう言うのと馬車に乗り込んだ。

スーランは荷台に揺られながら・・・ランの頭上にいるマドを見ていた。

「ちょっと、そんなに見ないでちょうだい！幾ら私がいい男だから
って・・・」

スーランは、それに返事をせずに関心を持っていた・・・
ランはその場の空気に落ち着かないでいた。

辺りがすっかり暗くなった頃、
テントを張ったオラル達一行は、食事を済ませると・・・早々に床に

着いた。

そんな深夜の星空の輝いている中を・

無数の飛行物体がメイロに向かって飛んで行った・・・

一行の誰ひとりとしてそれには気がつかなかった。

オラルを除いては・・・

翌朝、ようやく日が昇りかけた頃、

ジューンは一人、荷を片づけながら・・・馬車に乗せていた。
その音に起こされて、皆が目を覚ました。

「ジューンさん、早いですね」

ハルが・・・荷を運ぶのを手伝いながら挨拶をした。

「ああ、起こしてしまいましたか・・・

私は雇われていますから、このぐらいはさせて頂かないと」

「雇われだなんて、旅の仲間ではないですか」

ジューンは笑みを浮かべると、黙々と荷を積んだ。

日の暑さを感じ始めた頃、今は砂漠の一部と化した川までたどり
着いた・・・

「ここまで暑いと喋るのもしんどいな・・・」

オラル達の馬車は天布が日を遮ってくれてはいるが・・
横からの熱風には対処出来ないでいた・・・・

マドは荷台の後ろに体を括りつけ、
伸ばした体の先には・・

風船のように顔を膨らませ・・馬車の揺れに身を任せていた。

そこから少し先に、橋が渡してあるのが見えた。

「あの橋の下で休みましょう・・」

ジユンのその一言で、皆が納得した。

それなりに大きな橋で、日を十分に遮ってくれる。

暑さに疲れを感じたのか・・

馬車を橋の下に着けると皆、影に腰を下ろした・・

「なかなか堪えるな、

ジユンさん・・あと、どれくらいかかるものかな？」

水を飲んで一息ついたサルージが、横になりながら聞いた。

「距離だけなら・・半日ほど馬を走らせれば着くと思います。
ただ、ここから先は・・日を遮る場所が無いのです。

ここで夕暮れまで休んで・・

それから出発すれば、明日の朝方にはメイ口に着きます」

「そうかい、じゃ・・それまでひと眠りでもしようかね・・」

サルージが横になって、大きないびきを始めた頃・・

橋を渡る馬車や、人の行き交う声をきいた。

「・・・んん・・・どうした？・・・もう飯か？」

サルージが起きると・・・ジュンが土手を上がっているところだった。サルージはジュンを追いかけて土手を上がると、既にオラル達が、その様子に異変を感じていた・・・

「ジュンさん・・・これは・・・」

「・・・おかしい、この道を使うのには、よほどの訳が無いと・・・」

サルージは、橋に近づいて来た馬車に駆け寄ると・・・それを止めて聞いた。

「どうしたんだい！？・・・だいぶ急いでいるようだが？」

「あんた達、メイロに行くのか！？」

「そうだが・・・」

「なら、すぐに引き返したほうがいい！奴等が城に攻め込んできた！！」

駆け寄ったハルが聞いた。

「奴らとは？・・・魔人達の事か！？」

「・・・魔人、かも知れんが・・・ハッキリと見た訳ではないが、

街のあちこちで火の手が上がっていた。

逃げるときに・・・空に居た奴が城に向かって、

火の玉のようなもので城を攻撃をしているのが見えた・・・

それっきりで逃げてきた・・・悪いが先を急ぐよ」

そう言うつと馬車を走らせていった。

それを追いかけるように、

逃げてくる人の道が、はつきり見えるようになっていた。・・・

「何が起きているのだ・・・」

アラトがジュンに聞いた。

「パパ・・・ママ達、大丈夫かな・・・」

それを聞くや否や・・・

「すぐにここを発ちましょう！メイロに居る家族が心配です！」

ジュンが慌てるのを、オラルが止めた。

「ジュンさん、ここから急いでも半日はかかるのでしょっ？」

「・・・そうだが、じつとしては無理じゃない！」

少し考えて・・・オラルは言った。

「なら・・・マド！先にジュンさんと、アラトを連れてメイロに飛んでくれ。」

それから・・・スーランとランちゃんは、俺の馬でメイロに向かってくれ。

そいつなら大して時間をかけないで行ける。

残った馬で俺と、ハルさん、サルージで後を追う」

「・・・ちよっと！」っと、オラルを見ると・・・言いかけてマドはやめた。

この状況で断つたら・・・

マドは大人しく・・・ジュンとアラトに巻き付いた。

「マド、ジュンさんの家族を見つけたら、必ず安全な場所にお連れしろ。何があってもだぞ！」

「・・・分かったわ・・・まかせて頂戴」

半分納得のいかないマドは・・・一応、答えた。

「・・・オラルさん、すまない。このお礼は必ず！」

ジュンは、アラトをしっかりと抱いた。

「大丈夫ですよ、あとでまた会いましょう！」

軽く手を上げると、マドに合図をした。

「はいはい・・・では行くわよ！」

マドは・・・

昨日とは違う、大きな鳥に姿を変えると・・・空高く舞い上がって行った。

「・・・我々、獣人のようだ・・・」

ハルは、大空に消えていく鳥を見て呟いた・ ・ ・

首都メイロ

その頃、ヨマダイの首都メイロでは・・・

大魔術師でもあり、《闇の十人》の一人でもあるジェラの配下が、既に城を占拠していた・・・

大魔術師ジェラの計画は・・・

密かにこのヨマダイを手に入れ、

この城を拠点にして、《闇の十人》が世界を収めた後に、それらを殲滅し、我がモノとする為の準備に入っていた・・・

ジェラの配下であるメギアドスは、ジェラの命により、メイロの城の占拠と、この事態が外部に漏れないよう指示を受けていた・・・

「・・・まったく、手こずらせやがって」

そう言うメギアドスは・・・既に息の無い魔術師の首から手を離れた。

「メギアドス様、こちらも片付きました・・・
すでに逃げた人間共も、ガルの部隊が捕えるでしょう」

メギアドスの配下であるベルムグが報告をした。

「そうか・・・これより全ての城門を閉じ、メイロに続く一切の通路を断て！」

残った人間は、全てジェラ様が妖魔人にしてくださる！」

「御命令通りに・・・」

一方、メイロに近づいていたマド達は・・・
一気に急降下をすると、雲を突き抜けた。

視界が開けたその光景に・・・幾つもの煙の上がる街を見た・・・

「なんだ！？・・・」

「パパ・・・街が・・・」

涙ぐむアラトの目にも・・・徐々にはつきりとその全貌が見えてきた時だった。

城門の砦から怪しげな鳥のようなモノが飛び出すと、
真っすぐに向かってきた・・・

マドは咄嗟に距離をとった・・・が、それはマドの直ぐ横で静止をした。

それは・・・蝙蝠のような・・・人の姿をしており、今のマドの半分の体格であった。

そいつがマドに話かけた・・・

「・・・おい、おまえ・・・見ない顔だが？・・・」

俺に黙って、ジェラ様のご機嫌でもとろうつて魂胆か？」

「なっ！・・・ジエラ様！？・・・
そっ！そうよ！・・・私の手柄を奪う気！」

「・・・お前・・・なんか・・・おかしいな？・・・
おい、お前が取り付いた人間はどうした？」

マドの回りをゆっくり回りながら・・・疑いの目で見た。

「そっ！・・・そんなの、
気に入らないから・・・とつくに捨てちゃったわよ！
ジエラ様に新しい人間を用意してもらうんだから！
この人間は、その為の貢物よ！文句ある！？」

マドは、自身が妖魔人であった為・・・ジエラの行動を理解していたので、

何とか、その場をやり過ごそうと・・・強気に出た。

「・・・まあいい、人間は一人でも多く集めないと、
我々妖魔人の世界を築けないからな・・・
おい、人間は街の中心の広間に集める事になっている・・・
そいつらを下ろしたら、逃げた人間を一人残らず連れてこい、いいな！」

「そんな事！・・・言われなくなつて、分かっているわよ！」

マドは吐き捨てて言うと、街の広間を目指して飛んで行った。

「・・・変わった奴だ・・・」

マドを見送りながら呟いた。

「パパ！・・・ママ達大丈夫かな・・・」

「ああ、恐らく今の話だと、人間を集めて何かをするらしい・・・ママ達は無事だといいが・・・」

マドは二人を案じて言った。

「大丈夫よ！あいつ等はその人間の特性に合わせて取り付くから、一人の人間を妖魔人にするのに、時間がかかるから・・・滅多なことでは殺しはしないわ」

それを聞くと・・・ジューンは少しホツとして、アラトの頭を撫でた。

「あそこ！」

アラトが指差す方を見ると・・・広間を埋め尽くした人達で溢れていた。

「ジューン、アラト、とりあえず広間の近くに降りるわよ。見つからないように家族を探して！

見つけたら安全な所に連れていくわ！」

マドはゆっくりと・・・広間の端の家の影に降り立った。

マド達と同じように連れて来られた人達も多く、

乱暴に広間に投げられると、また飛び立っていった・・・

マドは元の姿に戻ると・・・アラトに巻き付いて身を隠した。

影から身を出した二人は、

すぐ目の前の通りを、人々が広間に向かわせられているを見た。

「よしっ、あれに紛れて探そう。アラト、パパの手をしっかり掴んでいろ」

「わかった！」

マドの後を追って、ランとスーランはメイロまであと少しの所まで来ていた・・・

「それにしてもこの馬・・・」

全力で、休みもしないで走り続ける事ができるなんて・・・」

「・・・私達二人乗っているのに、ほんとに・・・すごい・・・」

スーランは・・・

ふと、通り過ぎるメイロから逃げてきたであろう馬車や荷が、点々と置き去りにされているのに疑問を持った・・・

「ラン、そういえば通り過ぎる人を見た？」

「いえ・・・そういえば見ないですね」

どうしてだろう！？と、二人がそれを見ながら走っていると・・・後ろで《バタバタ》という音が聞こえてきた。

後ろに乗っていたスーランが何気なく振り返ると・・・

ゆっくり前を向き、手綱を握ると・・・ランの耳元で囁いた・・・

「ラン・・・ちょっと遊んで行こうか!？」

えっ?つと・・・

ランが答える間もなく、スーランは左先に見える岩山に進路をとった!

「ちょっと!?...」

スーランは全力で走らせながら、近づいて来た岩山に飛び出す姿勢をとると、ランに叫んだ!

「ラン!思いっきり暴れてみな!」

そう言い残すと、スーランは岩山の影に飛んだ!

「えっ!ちょっと!？」

ランが振り返ると・・・

エルード?と同じようなモノ達が、翼を羽ばたかせながら追っていた・・・

その顔は・・・とてもエルードのような美男子ではなく、どちらかといえば、獣・・・に近かった。

「ちょっと!なんなの〜!」

岩山の回りを走って逃げるランを見ながら、

スーランは不敵な笑みを浮かべた・

「1・・・2・・・5、か・・・よしっ！」

スーランは、すかさず岩山に登ると、
その足もとにある・短いトンネルを確認して叫んだ！

「ラン！こっちだ！ここを通って！」

大きく手を振って合図をすると・

ランは訳も分らずスーランの方へ向かった。

ランが獣？の、ようなモノを引き連れて・トンネルを目指した。
見事なまでに獣？達はピッタリとランのすぐ後ろについて来た・

「よしっ！」

スーランは、ランがトンネルに差し掛かったと同時に飛び降りた！

ランはトンネルを抜けると、振り返った・・・
少し煙の立ち込めたトンネルから、スーランが歩いて出てきた。

「うまくいったよ！」

ランは駆け寄ると・・・
そこには見事なまでに、真っ黒に焼きあげられている獣の姿があった・

「これって・・・」

「何者かな？こいつらがメイロを襲ったのかも・・・
どっちにしても、急いだ方がいいみたい」

二人は馬に乗ろうとした時・・・トンネルから声がした。

「何処に急ぐのだ！？・・・」

それは・・・黒焦げの獣ではなかった。

「このガル様のかわいい手下を、ここまでにしてくれるとは・・・」

日が暮れようとしているころ、岩山では、ランとガルが対峙をしていた・・・

「ラン、遠慮はいらない！ハルさんに恩返しをするつもりでやりな
！」

「はい！」

ランは、オラルから譲り受けた刀を構えた・・・

「・・・おい！さっきから調子に乗っているが・・・
小娘二人が俺様に勝てると思っているのか！？」

スーランは笑みを浮かべて言い返した。

「だいたい、俺様！とか言う奴に強い奴なんていないのさ！
本当に強い奴っていうのは・・・」

そこまで言いかけて・

「とにかく・ラン！勝てない相手じゃないよ！实力を見せてみな！」

ハッパをかけた。

「・・・まあいい、この小娘の後はじっくりと・・・お前をいたぶってやる！」

ガルは翼を羽ばたかせると・・・上空へ舞った。

ランはギュッと柄を握ると、突きの構えを取った。

「・・・いくぞ！小娘！」

ガルは大きく息を吸い込むと・・・口から拳ほどの火の球を幾つも噴き出した！

ランはそれをかわしながら、ジグザグに進路を取り、ガルに近づいていった。

一通りやりすごし・・・火の玉が出切ったのを見たランは、思い切り飛び上がると・・・ガルに斬りかかった！

だが、空中での動きでは・・・到底ガルには敵わなかった・・・

ガルは、ランの攻撃をヒラリとかわすと、

落ちていくランに・・・振りかぶった手から雷を見舞った！

ランはそれを背で受けるしかなかった・・・

が、刀の鞘が光りランを包むと・・・それを弾いた・・・

ランは・・・フワリと砂の地面に着地すると、

何事も無かったかのように立ち・再び構えた・

「生意気な・・・だが・・・そろそろ日が沈む。

お前達、人間は・・・暗闇では・・・なにも見えまい！」

ガルはゆっくり降下すると・・・フワリと降り立った。
日が沈むのを見ながら・・・スーランは呟いた・・・

「たしかにね・・・どうする？ラン・・・」

ランは・・・ジリジリと、ガルを中心にして回ると、
沈む夕日を背にして・・・構えた。

「小娘、残念だがお前の負けだ。

明かりの無くなるこの場では、俺には勝てん・・・」

ランは・・・戦い始めてから、

自分に言い聞かせるように・・・話しかけた。

「・・・ハルさんが教えてくれた事・・・そしてこの刀・・・」

ジツと刀を見て言い終えると・・・

徐々にランの影が短くなり、最後の日の光が消える直前・・・

ランは素早く、右に飛んだ！

「なにつ！」

ガルは、沈む直前の光を受けると一瞬・・・視界を完全に失った！

日が沈むのを追うように・・・額から血を流し・・・ガルも倒れた。

「なに？・・・ラン？・・・やったの！？」

スーランにも、その瞬間の出来事が理解できないでいた・・・

「・・・よかった・・・ちゃんと出来た・・・」

ランは急に気が抜けると・・・その場に座り込んだ。
そこに、スーランが駆け寄ってきて聞いた。

「ラン、今のは！？」

「はい・・・ハルさんに教わった技です・・・
でも、この刀でなければ・・・勝てなかったかも・・・」

「・・・アハハ、そうかつ！良かった、良かった！」

スーランはランを抱き寄せると、自分の事のように喜んだ。
ランも・・・その腕の中で涙を浮かべながら・・・
喜びをかみしめていた・・・

「おゝいゝ！・・・」

遠くから・・・聞き覚えのある声が近づいて来ていた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434x/>

ルードシアの守り人～黒?～

2011年10月12日14時12分発行